

目次

■ 第37回年会 参加登録費払込票	
■ 第19期理事選挙について（公告）	1
■ 第19期理事選挙要項	1
■ 理事長からのメッセージ（2014年初夏）	4
■ 学会誌『Genes to Cells』に関するお知らせ	6
■ 高校などへの講師派遣事業および年会での高校生発表について	6
■ キャリアパス対談 第4回：白髭克彦×小野弥子	7
■ 第4回（2014年）富澤基金による研究助成の審査経過・結果報告	10
■ 第3回（2015年）日本分子生物学会国際会議支援 助成決定会議のご報告	11
■ 第37回（2014年）日本分子生物学会年会 開催のお知らせ（その2）	12
【年会のコンセプト その2】	12
【プログラム】	12
【年会企画】	13
【参加者へのご案内】	14
【参加登録について】	15
【一般演題（ワークショップ・ポスター）募集について】	17
【フォーラム企画の公募について（応募締切：2014年7月22日火）】	19
【全体日程表（予定）】	20
【ポスター発表分類一覧】	21
【シンポジウム・ワークショップ日程表】	22
【シンポジウムテーマ一覧】	24
【ワークショップテーマ一覧】	27
【宿泊申込のご案内】	38
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	42
■ 研究助成一覧	42
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ	46
○第19回日本病態プロテアーゼ学会学術集会	
■ 第18期役員・幹事・各委員会名簿	47
■ 賛助会員芳名	48

Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Mitsuhiro Yanagida

Frequency: Monthly | Impact Factor: 2.731

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や、先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界で4,000以上の機関で読まれており、年間333,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。

Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への収載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6ヵ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- 出版されると直ちに無償公開となるオープンアクセスオプション『OnlineOpen』（有料）をご利用いただけます
- 2012年9月より、全ての総説は日本分子生物学会が費用を負担してOnlineOpenで公開中

オンライン投稿はこちら
<http://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2012年・2013年出版 引用数TOP論文 *2014年4月現在

Efficient TALEN construction and evaluation methods for human cell and animal applications (Volume 18, Issue 4)

Sakuma, T; Hosoi, S; Woltjen, K; Suzuki, K; Kashiwagi, K; Wada, H; Ochiai, H; Miyamoto, T; Kawai, N; Sasakura, Y; Matsuura, S; Okada, Y; Kawahara, A; Hayashi, S; Yamamoto, T

Structures of D14 and D14L in the strigolactone and karrikin signaling pathways (Volume 18, Issue 2)

Kagiyama, M; Hirano, Y; Mori, T; Kim, S.Y; Kyojuka, J; Seto, Y; Yamaguchi, S; Hakoshima, T

Beyond apoptosis: caspase regulatory mechanisms and functions *in vivo* (Volume 17, Issue 2)

Kuranaga, E

ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会の会員はオンラインジャーナルに無料でアクセスしていただけます。

ユーザー登録は学会事務局までお申し込みください。

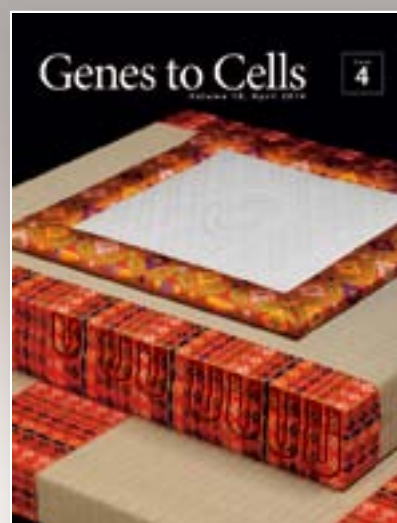
日本分子生物学会事務局: info@mbsj.jp

登録後のアクセスに関するご質問は、

Wiley カスタマーサービスにて承ります。

Wiley カスタマーサービス: cs-japan@wiley.com

WILEY Blackwell



第 19 期理事選挙について（公告）

2014 年 6 月 10 日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

日本分子生物学会の定款第 14 条及び同細則第 2 条により、第 19 期理事選挙を行います。選挙業務を行うため、金井正美会員（医科歯科大・実験動物センター）に選挙管理委員長、塩見春彦会員（慶應大・医）、白髭克彦会員（東大・分生研）が選挙管理委員として、大隅典子理事長より委嘱されました。次いで執行部（庶務幹事）と選挙管理委員会の打ち合わせを経て、具体的には以下のように選挙を行うことになりました。ここに公告いたします。

会員各位におかれましては、次の選挙要項をお読みいただき、ぜひ積極的に理事選挙の投票に参加してくださるようお願い申し上げます。

第 19 期理事選挙要項

今回の理事選挙における選挙権者（正会員、名誉会員、学生会員）、被選挙権者（正会員のみ）は、2014 年 6 月 20 日までに入会手続きを行った会員とします。投票は、学会ホームページの「会員専用ページ」上において、電子投票により行われます。選挙権者は会員専用ページへログインし、被選挙権者の中から 10 名以内を選んで投票してください。

（注）ログインに必要な ID（6 桁の会員番号）とパスワードが不明の会員は、本学会のホームページから再発行申請書をダウンロードし、速やかに再発行の手続きを行ってください。（個人情報の保護を考慮し、ログイン ID・パスワードの内容に関して、お電話ではお答えできませんのでご了承ください。）

○理事選挙の概要

定款第 14 条及び細則第 2 条により、第 19 期（任期：2015 年 1 月 1 日～2016 年 12 月 31 日）の理事選挙を行います。選挙権者の投票により、得票数の多い順に 30 名を当選者とします。ただし、本選挙においては、細則第 2 条 5）の時限特別措置が適用され、理事定員の 10%（3 名）の女性理事枠が設置されていますので、選挙により 3 名の女性当選者が選出されなかった場合には、選挙管理委員会が女性理事が最低 3 名になるまで調整を行います（理事定員 30 名に変更はありません。3 頁の細則・抜粋を参照ください）。

30 位が得票同数の場合は、選挙管理委員会において厳正に抽選を行い、当選者を決定します。また、上述の女性理事の調整の際に、女性理事枠 3 人目の当選者が全体の 30 位より下位で得票同数となった場合も選挙管理委員会における抽選により決定します。

なお、現在 2 期連続（第 17 期～第 18 期）して理事に就任している以下の方々には、被選挙権がありませんのでご注意ください。

阿形清和、五十嵐和彦、石川冬木、上田泰己、大隅典子、後藤由季子、小原雄治、田中啓二、月田早智子、中山敬一、西田栄介、花岡文雄、三浦正幸、山本雅之

○投票前の確認事項

- ・選挙権者は、被選挙権者の中から 10 名までを投票できるものとします。
- ・投票期間：2014 年 6 月 23 日（月）9：30～7 月 11 日（金）17：00（時間厳守）
（開票予定日：2014 年 7 月 15 日）
- ・第 19 期理事選挙に際して現理事会の責任のもと、同封の通り、126 名の理事候補者参考リストが作成されましたので、ご覧ください。ただし、候補者リストはあくまでも投票のご参考のためであり、リスト以外の被選挙権者への投票を何ら妨げるものではありません。
（会員専用ページ・選挙ページ内にも、会員番号付参考リストを掲載していますので、ご利用ください）
- ・次の場合には、システム上、投票が受け付けられません。
 - 1）投票後に再投票した場合
 - 2）投票期間終了後に投票した場合
 - 3）現在 2 期連続（第 17 期～第 18 期）して理事に就任している、被選挙権のない正会員に投票した場合

4) 被選挙権のない名誉会員及び学生会員に投票した場合

○投票の流れ

1. 日本分子生物学会ホームページ <http://www.mbsj.jp/> にアクセスする。
2. ログイン ID (6桁の会員番号) とパスワードを入力し、会員専用ページに入る。
3. 電子投票「理事選挙」をクリックし、「電子投票注意事項」ページを読む。
4. **重要** 投票は、投票者(被選挙権者)の会員番号入力により行われるので、事前に、投票したい会員 10 名以内の会員番号を調べて、手元に控えておく。
※会員番号は次のいずれかの方法でお調べください。
 - ①理事候補者参考リスト(選挙ページ内にも会員番号付参考リストが掲載されています)
 - ②会員専用ページ内の会員名簿(会員検索・閲覧)
 - ③被選挙権者名簿(選挙ページ内 PDF 版)
5. 「投票者入力画面」へアクセスし、10 名以内の会員番号を入力し、「登録」ボタンをクリックする。
6. 「確認画面」にて投票した会員を確認し、内容に間違いがなければ、「投票」ボタンをクリックする。
7. 最終確認の表示「投票を行います。よろしいですか?」が出たら、OK をクリックする。
8. 投票完了。

投票期間中は、被選挙権者の会員管理システム上における「所属の名称・部署」が公開設定となります。これらの項目を非公開設定としている会員はあらかじめご承知おきください。また、自宅を連絡先に設定している被選挙権者の「所属の名称・部署」は、「自宅の都道府県名+在住」と表示されます。(例：東京都在住)

○選挙結果の告知

投票結果は会報 109 号(11 月発行)および学会ホームページで、会員の皆様にお知らせします。

2014 年 6 月 10 日
特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 19 期理事選挙・選挙管理委員会
委員長 金井正美
委員 塩見春彦、白髭克彦

『参考』 定 款 (抜粋)

第 3 章 役 員

(種別及び定数)

第13条 この法人に、次の役員を置く。

- (1) 理事 25 人以上 35 人以内
- (2) 監事 1 人以上 3 人以内

2 理事のうち、1 人を理事長とし、2 人以内の副理事長を置くことができる。

(選任等)

第14条 理事は、正会員の中から、正会員、名誉会員及び学生会員の投票により選任される。

- 2 理事長及び副理事長は、理事の互選とする。
- 3 役員のうちには、それぞれの役員について、その配偶者若しくは三親等以内の親族が 1 人を超えて含まれ、又は当該役員並びにその配偶者

及び三親等以内の親族が役員の総数の 3 分の 1 を超えて含まれることになってはならない。

4 法第 20 条各号のいずれかに該当する者は、この法人の役員になることができない。

5 監事は、正会員の中から、総会において選任する。

6 監事は、理事又はこの法人の職員を兼ねてはならない。

(職 務)

第15条 理事長は、この法人を代表し、その業務を総理する。

2 副理事長は、理事長を補佐し、理事長に事故があるとき又は理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ指名した順序によって、その職務を代行する。

- 3 理事は、理事会を構成し、この定款の定め及び総会又は理事会の議決に基づき、この法人の業務を執行する。

(任期等)

第16条 理事、理事長及び副理事長の任期は、2年とする。ただし、3期連続して選出されることはできない。

- 2 監事の任期は、2年とする。ただし、2期連続して選出されることはできない。

- 3 補欠のため、又は増員により就任した役員の任期は、それぞれの前任者又は現任者の任期の残存期間とする。

- 4 役員は、辞任又は任期満了後においても、後任者が就任するまでは、その職務を行わなければならない。

『参考』 細 則 (抜粋)

第2章 役員の選出

第2条

理事は、次の各号に掲げる方法により選出する。

- 1) 理事長は、正会員の中から3名を選出し、選挙管理委員を委嘱する。選挙管理委員により構成する選挙管理委員会は選挙事務を行う。

- 2) 投票は1人1票、無記名による10名連記とし、別に定める方法により投票を行う。

- 3) 得票者中の上位の者より順に30名を選出する。ただし、同数得票者については選挙要項に従い順位を定める。

- 4) 理事は3期連続して選出されることはできない。この制限に抵触する者の氏名は選挙要項に公告される。

- 5) 時限特別措置(17期－19期までの6年程度)として、理事定員30名の10%(3名)の女性理事枠を設ける。選挙により3名の女性当選者が選出されなかった場合は、女性理事が最低3名になるまで調整を行う。ただし、理事定員30名に変更はないものとする。

定款及び細則の全文は本学会のホームページからご確認いただけます。

※ <http://www.mbsj.jp/> → 学会概要 → 定款・細則

理事長からのメッセージ（2014 年初夏）



「科学」という手続き

本当はもう少し、せめて桜の咲いているうちに書きたかったのですが、諸事情により遅くなりました。「諸事情」というのは、国内外の生命科学系の研究者だけでなく日本の多くの国民まで巻き込んだ「不思議な性質の多能性幹細胞」をめぐる一連の騒動のことです。

個人的な見解については拙ブログの方に書いていますが、日本分子生物学会としては、3月3日と11日に「理事長声明」を出しました。問題となった Nature の2本の論文の筆頭著者は本学会の会員ではなく、個別の論文不正問題に踏み込んだ声明は異例なことだと思っていますが、今回の事件は社会の関心も高く、研究倫理委員会および執行部で話し合った上での声明発表でした。

記者会見の様子が動画配信され、7時の NHK ニュースのトップで20分近くも報道されるに至り、この不思議な細胞にまつわる話題は、もはや科学の世界の問題ではなくなりました。週刊誌に科学者の名前が毎週のように掲載されるような事態を誰が想像したでしょうか。これらの報道のされ方を見ていて、改めて科学の世界のできごとを一般市民に伝えることの難しさを認識しました。

人間が智を得る手段は科学だけではありませんが、科学の世界では自分が発見したことを知らせるための「手続き」がきちんと決まっています。自らが「悟った!」「発見しました」「信じています」と言うだけでは駄目なのです。何らかの「仮説」に基づいた研究であれば、それを支持する証拠を探し、そのデータを正確に記録し、再現性を確かめます^(脚注)。もし再現性が無ければ、仮説を修正する必要があるのかもしれませんが。十分に再現性があり、人に伝えることのできる確証を持ったなら、それを他の科学者にも見てもらって批判を受けます。必要があれば、さらなるデータの追加や、より厳密なデータを示すことを求められます。これらの「手続き」に不備があれば、それは科学の組上には載せるべきではありません。科学には健全な批判精神が必要です。そして、学術団体が主催する年会・大会などは、まさにそのような議論を行うための場なのです。

また、学術誌に掲載された論文は、その後も多くの科学者による再現性の検証がなされ、初めて科学の世界で認知されるようになるものです。1960年代初頭に Joseph Altman らがラット脳で発見した生後の神経新生は、その後、半世紀かけて吟味されて霊長類でもその存在が確かめられ、認知機能や情動行動に関係することがわかりました。ヒトにおいても、1990年代終わりに癌患者のボランティアにより成体脳における神経新生が報告されましたが、ついに昨年、14Cを用いた画期的な手法により、健康な成人の脳でも生じていることが検証されました。Altman 先生が最初の発見者としてその功績により国際生物学賞を受賞されたのは最初の論文発表から半世紀後の2012年のことになります。

この10年ほどの間に、アウトリーチ活動の重要性が説かれ、研究成果を科学報道に繋げる努力が為されてきました。論文発表を科学報道につなげるためのプレスリリース文では、「何々の発見：これこれに役立つことが期待」などのタイトルを付けることが多いのも事実です。しかし、科学者たちや研究機関の広報担当者は、それがまだ「途中段階」であることを折込済みで、あえてキャッチーな言葉を用いるのですが、マスメディアの報道を見た・読んだ市民には、あたかも論文発表は完成型として受け取ることが多いということも、今回の騒ぎで強く認識したことでした。

日本分子生物学会では、昨年の理事会フォーラムや今回の事例も踏まえ、学会としての対応を打ち出す予定です。日

本学術会議では、本年1月25日に「科学者の行動規範—改訂版—」(<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-s168-1.pdf>)を発出しました。文部科学省の研究活動の不正行為に関する特別委員会の報告書「研究活動の不正行為への対応のガイドラインについて」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu12/houkoku/06082316.htm参照)では、それぞれの研究組織、研究資金配分機関、学協会等学術団体における取り組みについて挙げられています。また、CITI Japan プロジェクト(<http://www.shinshu-u.ac.jp/project/cjp/>)では、米国 CITI Program との連携により、研究倫理を学ぶための e-learning システムを提供しており、研究不正の定義やオーサiershipの問題が解説されています。すでに JST の研究プロジェクト遂行者には受講が義務付けられている他、沖縄科学技術大学院大学などでは教育カリキュラムに取り入れられました。これらの状況を踏まえ、学協会側としてはどのような対応が現実的かつ実効性が高いかについて吟味する必要があります。

研究不正問題は、研究者コミュニティーを構成する一人ひとりにとって重要な問題です。これは決して若手研究者が未熟だから生じる問題ではなく、先輩やグループリーダー、そして研究室主宰者の脇の甘さが災いする可能性があります。研究不正が起きるのを防ぐ努力こそ、起きてしまった不正に対応するよりも、長い目で見れば時間やコストのかからない賢明な策といえるでしょう。

さて、最後に嬉しいお知らせを一つ。過日行いました分子生物学会の「キャラクター」とその「名称」の募集には、なんと259点もの応募がありました！ 会員の皆さんによるweb投票(5月9日の17時まで)により決定する予定です。決定されたキャラクターデザインをもとに、今後、グッズの作製などを行い、分生が行う高校生向けイベント等で用いることになっています。乞うご期待！

また、日本分子生物学会では2年ごとに理事の選挙を行います。学会の運営に携わり、その方向性を決める理事を選出するのに、皆様の意志を反映する機会です。投票はオンラインで行い、期間は6月23日から7月11日です。ぜひ投票をお忘れなく！

脚注：科学の分野によっては再現性を検証することが困難なこともありえます。例えば進化の過程でどのように生物が変わっていったかなどは、仮説の検証が難しい命題です。また、今後、個人のゲノム解析が進んだ場合に、一人ひとりのゲノムの300万塩基対の違いや、さらに経験や環境によって影響を受けるエピゲノム修飾を考慮すると、究極にはまったく同じ条件を再現することが難しいという状況も想定できると思います。今後このような「一回性の科学」を生命科学がどのように取り扱うようになるのかは興味深いことです。

2014年4月
特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第18期理事長
(東北大学大学院医学系研究科)
大隅 典子

学会誌『Genes to Cells』に関するお知らせ

「生命現象の基本的分子メカニズム」に焦点をあてた純粋な国際誌を目指し、『Genes to Cells』は1996年に創刊されました。また、その内容が国際的な視野に立つことを考慮し、日本の出版社よりも専門誌の刊行に長い経験を持つBlackwell社（現Wiley社）に本誌の印刷と発行を任せ、学会が編集の責任を負う独自のスタイルで出版してきました。

学会員の成果を発表するという従来の概念に捉われることなく、より広い分野からの投稿を受け付けるよう、2011年に投稿規定を大幅改訂したほか、日本の伝統絵画の中に生命科学の遊び心を加えた表紙デザインを採用するなど、形式より実質を重んじる本学会の気風を背景に、『Genes to Cells』の出版は大胆且つ柔軟に取り組んでいます。

このたび、インターネットなどの新たな情報媒体の普及を受け、2015年1月号からは電子版のみを刊行することになりました。『Genes to Cells』をこれまで支えていただいた読者の皆様、執筆者の方々に、この場を借りて心より御礼を申し上げますと共に、生命科学分野における間口の広い学術雑誌として、引き続き皆様からの投稿をお待ち申し上げております。現時点で40作品以上をリリースしてきた本誌の表紙デザインは、その素材に関わる業界の方々、高校生や教師、アーティストからも好評をいただいております。今後は新たなデザインが電子版のホームページを飾って参ります。

突然のお知らせにて恐縮ですが、どうかご理解を賜りますようよろしくお願いいたします。

編集幹事 上村 匡

高校などへの講師派遣事業および年会での高校生発表について

分子生物学会では、ライフサイエンス系で最大規模の学会である社会的な責任を鑑み、これからの日本の未来を背負う若者への分子生物学の普及・教育を念頭に、高校などへの講師派遣事業をおこなっています。

この事業は、高校生物学の教科書が大幅に改訂され、分子生物学を1つの大きな柱とした内容の授業が開始したことを受け、現場を担当する教師の方々と本学会が分子生物学に関する新しい情報の共有を目指したもので、講師候補として168名（2014年5月1日現在）の方に登録して頂き、これまでに13回（2014年4月現在）の出前講義を実施してきました。

しかし、分子生物学が幅広い生物学の領域を扱い、かつ、日進月歩の学問領域であり日々情報が変わっていくといった、他の理系科目とは異なる側面を持っていながら、講師の登録が少ない地域や専門分野がみられる状況にあります。（SSHなど国から予算を得ているところ以外には）“無料”で会員を派遣する事業ですので、大変恐縮ながら交通費は原則会員個人のご負担となりますが、勤務地や住所地の近傍など交通費が最少になる地域でマッチングするなどの工夫をして効果をあげたいと考えています。是非、講師派遣事業へのご理解とご協力をお願いします。講師としてお申し出を頂ける方は、事務局まで連絡をお願いします。お知り合いの高校教員や一般の方で、出前授業などの講師を探している方がいらっしゃいましたら本事業をお知らせください。

また、今年で3回目となる高校生による口頭・ポスター発表を年会最終日の11月27日（木）16:15～18:15にパシフィコ横浜の展示ホールでおこないます。興味のある方は未来の分子生物学を担う高校生との交流を図り、激励の言葉をかけて頂ければ幸いです。

本事業の具体的な活動については以下のURLを参照してください。

【日本分子生物学会－生命科学教育】

<http://www.mbsj.jp/activity/education.html>

第18期理事（生命科学教育担当）篠原 彰

キャリアパス対談 第4回：白髭克彦×小野弥子

委員：白髭克彦（東大・分生研）、
小野弥子（都医学研）

日時：2014年4月30日(水) 15:00～17:30

場所：東京大学分子細胞生物学研究所

【白髭】キャリアパス委員会に改組される前から活動している身としては随分長いこと学会に奉公している気がしますが（笑）、特に若手をエンカレッジすることが主たる目的ですから、今日はそのあたりの原点を意識しながらお話してみたいと思います。小野先生、よろしくお願いします。

【小野】白髭先生、こちらこそお願いします。私は男女共同参画学協会連絡会の担当委員をしています。前任の先生からお話があったときは正直驚きましたが、研究室を運営している先生方との交流を通して勉強させていただいています。

【白髭】さて、タイミング的にもふれないわけにはいかないという感じですが、4月4日の衆議院内閣委員会で研究の不正防止策について尋ねられた山中さんが「わたしもそうでありましたが、30代の研究者というのは、実験の方法は上手だが、それ以外の点についてはまだまだ未熟な人間であります」と答弁しました。これが「30代の研究者は未熟！」と見事なまでに切り貼られてしまい、当事者である30代のなかにも違和感をおぼえた方は少なくなかったと思います。

【小野】ここ数ヶ月のあいだ世間を騒がせていることなので、自分たちが関わっている分野まで疑われてしまうのはすごく悲しいですが、それよりなにより、30代をひとくくりにも過保護の対象とするのはどうかなと思います。



した。

【白髭】まったくそのとおりですね。ひとつの考え方として、修士までは学生ですけど、博士からは社会人でなければいけない。少なくとも私はボスにそう言われていました。世間一般のサラリーマンが働き始める時間には自分も研究室に就業する。国民の税金で研究させてもらっているんだから、その分の責任をまっとうしながら、やりたい仕事は早朝や深夜にまわしてでも徹底的にやる。ですから、博士課程に進んだ時点で社会人としての自覚を持つのが当たり前だと思うので、山中さんの発言はそういう意味で支持していません。

それに、テニュアトラックの制度にしても、今ほどめぐまれている時代はないんじゃないかと思っています。あまやかされていると言っては怒られそうですが（笑）。

【小野】はい。私のまわりでも、そういった意見が聞かれます。過保護にされたくはないけれど、制度として使いやすいかといった疑問符が付くと。ひょっとしたら、研究者サイドだけではなく、行政や大学サイドでも制度の変更は検討の余地ありとされているかもしれません。コツコツと実験を積み上げる基礎研究と一緒に、常に現状より改善していくには様々な立場の方とタッグを組む柔軟性が求められるのでしょうかね。

【白髭】昨日までポスドクだった若手がいきなりお金を渡されて、3年とか5年でなんとかするよう発破をかけられます。「論文はCNSに出してね！ 研究室のマネージメントもしっかりね！」

これだと、できる人は若くしてディクテーターになってしまう反面、すぐに適応できない人は戸惑いつつ破綻してしまう。テニュアトラック制度にはそんなリスクが

潜んでいるんじゃないかと思うんです。そう考えると、タッグを組むべき行政や大学が現行の制度をどう評価しているのか、キャリアパス委員会で調べてみる必要があります。

【小野】一流誌への論文掲載がステータスの指標となっている背景には、研究資金の配分というリアルな問題があります。1996年に科学技術基本計画が策定され、国家戦略のひとつとして科学技術が取り上げられるようになりましたが、研究者自身による自由な研究つまりボトムアップ型研究への資金配分が減少しているとの声が少なくありません。

【白髭】そうなんです。特にバイオの分野は、創薬とか再生医療など産業につながる出口研究が求められるようになってきました。トンネルに入ったままではなく、出口を見据えた研究をしないとされます。文科省の科研費でもそうなんですから、研究室のマネジメントをする立場としては無茶苦茶しんどい時代です。

しかし、ある研究テーマが50年とか100年くらい受け継がれて、その結果として本当の意味で即物的に役に立つものができればいいと願うのが私たちの真意だとすると、基礎研究にはそぐわない考え方だと言わざるを得ません。

【小野】私はボスがいる立場なので、そこまでの認識にはまだ至っていません（笑）。でも、カメレオンのようにテーマを変えて研究をするにしても、本筋本流の研究は大丈夫かしらと思ってしまいます。

それに、科学技術立国と打ち出しているわりには、ただでさえ労働人口が減少している時代に、テニユアを推進して任期付きの若手を増やしてきました。これでは、国の政策がどちらへ向いているのかさえもわかりづらく、混沌とした現場の状況を招いた大きな要因となったのではないのでしょうか。



【白髭】人間ってそんなキャパのあるものではないし、小野先生がおっしゃるように、カメレオンで成功できる人はいませんよ。「自分のエフォートは200%だ!」なんて言う人もいますが、そんなスーパーマンは冗談のなかにしか存在しません（笑）。

ある一定のバラまきをしないと科学技術は育たないと思いますが、時代はヒトへの応用に向かっています。私は酵母からマウス、そしてヒトを対象にしてきたのですが、一世代が1時間半の酵母に比べて、マウスは年単位ですよ。研究室を立ち上げて、マウスを飼育して研究を始め、数年後に結果はどうでしたかと問われるわけです。やはり10年くらいの単位でみないと、負のスパイラルから抜け出せなくなってしまいますよね。

また、ヒトのためにならない研究はやっても仕方ないという雰囲気を感じ、特に生命系の我々にとっては殺伐とした感じも否めません。そこにきてのSTAP騒動ですから、世間一般の方から奇異な見方をされてしまうのが本当に悲しい。

最近はその厳しさばかりが際立っていますから、そうではなくて、研究は夢のある仕事だということをあらためて伝えないと。自分が本気で取り組んだ研究がおもしろくないなんてことはないはずですし、誰も見向きもしない荒地を耕すという仕事にこそ真価があるということも認識されるべきです。本来もっとおおらかであるべき基礎研究がなんで今日のようになってしまったのか。STAP騒動はいい反省材料とすべきです。

【小野】研究者には仮説を立ててそれを検証するという自由があります。既存の理論に照らすと突飛に思えるような仮説だとしても、そこに何か新たな発見があるかもしれないですから。だからこそ不正をしない、そして批判や疑義にも研究者としての立場できちんと答えるという暗黙のルールがあって、それがコミュニティの一員である大前提です。

【白髭】2002年にベル研で起こったヘンドリック・シェーンの論文捏造事件では、「小学生でもやらないことを彼はやった」不正調査委員会の議長がこんなことを言ったそうです。つまりそれは、論文を捏造する当人は確信的にやるわけで、いくら捏造はいけなくとも教育をしても、そういう確信犯がコミュニティに混入してきたら防ぎようがないという皮肉にも聞こえます。そう考えると、むしろガバナンスをしっかりとやらなくちゃいけないのに、今回の騒動はまったく逆の状況になっていますよね。科学としてではなく、法的な問題とごちゃまぜにされてしまったいま、研究者にとってもありがたくない結果、制度へと向かってしまっているように思います。

ある方が言っておられたことですが、「基礎研究者は



真理を追究することを国民から委託されている」つまり「研究を職業とすることを国民から許されている」のだと。時代は移ろい行くけれども、研究者のマインドとしてはそれがすべてですよね。またそれが研究者のプロ意識の根底にあるべきだと思うのです。私くらいの年齢になると世の中の汚れも少しずつ経験しますから、きれいごとばかり言うてはいられないという側面はもちろんあるけれど。

山中さんも「若手研究者の自由な発想がイノベーションには必要」と言っていました。若手の皆さんには魂を大切にしてください。ノートの書き方だって知っているし、彼らは未熟ではありませんから。

【小野】 ノートの書き方は私も知っているつもりです(笑)。

【白髭】 研究者のコミュニティは、正直に生きている人は決して見捨てないと思いますよ。

「Let it go!」

～日本分子生物学会キャリアパス委員会—ミッション～

生命科学領域の中で「分子生物学」は比較的新しい分野であるが、その発展は目覚ましく、社会への貢献も非常に大きい。一方、分子生物学会に属する若手研究者、女性研究者が置かれる状況は、今なお、決して満足のいくものではないことも周知の事実である。第18期から新しく始まる「キャリアパス委員会」では、若手・女性研究者を取り巻く数多くの問題を、男女共に提起・分析し、軽減そして解消することを目指します。

～日本分子生物学会キャリアパス委員会—対談～

第1回：塩見×小林（会報105号）

第2回：東山×五島（会報106号）

第3回：井関×岩崎（会報107号）

第4回：白髭×小野（会報108号）

第5回：斎藤×石井（会報109号に掲載予定）

第6回：佐藤×柳田（会報110号に掲載予定）

第4回（2014年）富澤基金による研究助成の審査経過・結果報告

基金運営委員会委員長 山本 正幸

「日本分子生物学会若手研究助成富澤純一・桂子基金」による第四回研究助成の最終審査を5月10日に行い、4名の方々に助成を決定いたしました。応募者は88名、お名前からの推定で男性66名、女性22名でした。書面審査により10名の方をヒアリングにお招きしましたが、1名の方は別途研究費が得られたとの理由で辞退され、9名の方の研究内容を伺った結果、助成対象者として男性2名女性2名を選びました。

過去の審査と同様に、審査過程で性別に配慮することはなく、また特定の立場を優先したということもありません。当基金の目的とするところは、分子生物学、あるいはさらに広く生命科学の新しい展開を目指す研究を志しながらも、研究費の欠乏や生活上の制約のために十分に力を発揮できていない若手研究者に、使途を限定しない助成を行って、研究の発展を可能にさせることです。したがって、研究内容が高度な提案であっても、他の研究資金でその大半は実行可能というような場合には、助成の必要度は低いと判定される傾向にあります。

審査過程では応募者が日本分子生物学会会員か否かは非開示でしたが、結果的には3名が会員でした。ヒアリングを行った9名の方（男性5名女性4名）については6名が会員、3名が非会員でした。

基金運営委員会および分子生物学会事務局では、使途を限らない本助成の特色を活用した、創意に富んだ研究推進提案を歓迎いたします。来年度以降も優れた研究を掲げて奮ってご応募ください。

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」基金運営委員会
委員：山本正幸（委員長）、岡田清孝（副委員長）、阿形清和、
大隅典子、近藤 滋、塩見美喜子、嶋本伸雄、谷口維紹

■第4回（2014年）日本分子生物学会 若手研究助成の助成対象者

（氏名・所属機関・研究題目）50音順

○木下奈都子（筑波大学生命環境系 / 申請時の所属は The Rockefeller University）

環境ストレス下において負の因子として機能している長鎖非コードRNA、NPC60がどのように正の鍵因子であるbZIP型転写因子ABI5を制御しているのか、その分子機構の解明

Elucidating the molecular mechanism of how a functional long non-coding RNA, NPC60, down-regulate key positive factor and bZIP transcription factor, ABI5 under abiotic stress.

○濱田一川口 典子（東北大学大学院生命科学研究科）

Btk29A 非受容体型チロシンキナーゼによる卵巣腫瘍抑制機構の解明

The Analysis of the regulation of ovarian tumors by the non-receptor type tyrosine kinase Btk29A

○水本 公大（Stanford University / 2015年1月より The University of British Columbia に赴任予定）

動物の動きを規定する分子基盤の解明

Understanding the molecular basis that governs animal locomotion

○宮成 悠介（自然科学研究機構 岡崎統合バイオサイエンスセンター）

核内ゲノム動態による転写制御機構の理解

Understanding of the mechanism underlying transcriptional regulation by nuclear dynamics

第3回（2015年）日本分子生物学会国際会議支援 助成決定会議のご報告

第3回めとなる日本分子生物学会国際会議支援については、選考委員会における慎重な審査を経て、以下の3会議が採択されましたこと、ここにご報告いたします。

第18期国際会議支援・選考委員会

西田 栄介（委員長）、上田 泰己、岡田 清孝、田中 啓二、三浦 正幸

■会議名称：

（和文）第8回国際分裂酵母会議

（英文）The 8th International Fission Yeast Meeting

開催責任者：平岡 泰（大阪大学大学院生命機能研究科・教授）

会 期：2015年6月21日(日)～26日(金)

会 場：生田神社社会館（神戸市）

助成金額：270万円

■会議名称：

（和文）トランスポゾン転移とゲノム編集技術に関する国際会議2015

（英文）Conference on Transposition and Genome Engineering 2015

開催責任者：竹田 潤二（大阪大学大学院医学系研究科・教授）

会 期：2015年11月17日(火)～20日(金)

会 場：奈良県新公会堂（奈良市）

助成金額：230万円

■会議名称：

（和文）がん免疫療法・マクロファージ国際会議2015

（英文）International Conference of Cancer Immunotherapy and Macrophages 2015

開催責任者：松島 綱治（東京大学大学院医学系研究科・教授）

会 期：2015年7月9日(木)～11日(土)

会 場：東京大学伊藤国際学術研究センター内伊藤謝恩ホール

助成金額：200万円

第 37 回 (2014 年) 日本分子生物学会年会 開催のお知らせ (その 2)

会 期：2014 年 11 月 25 日(火)～ 27 日(木) (3 日間)
会 場：パシフィコ横浜
年 会 長：小安 重夫 (理化学研究所統合生命医科学研究センター)
演 題 登 録 期 間：2014 年 7 月 1 日(火)～ 7 月 31 日(木)予定
事前参加登録期間：2014 年 7 月 1 日(火)～ 9 月 30 日(火)予定
*サーバーメンテナンス等の関係で前後する可能性があります
年会事務局連絡先：第 37 回日本分子生物学会年会事務局 (株)エー・イー企画 内)
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 岩波書店一ツ橋別館 4 階
Tel : 03-3230-2744 Fax : 03-3230-2479 E-mail : mbsj2014@aeplan.co.jp
年会ホームページ : <http://www.aeplan.co.jp/mbsj2014/>

【年会のコンセプト その2】

年会まで半年余りとなりました。シンポジウムの企画も出そろいました。もうすぐ演題の募集が始まります。

第 37 回年会は、サイエンスの議論を中心に、皆がデータを前にとことん議論のできる学会を目指します。以前にもお知らせしましたが、今年の年会はポスター討論を中心におきます。ワークショップも一般演題から多くを採用して構成します。指定演者もお願いしますが、指定演者にもポスターを出してもらいます。そして、第 32 回の小原年会で行われたディスカッサー制度を復活し、ポスター会場での議論の火付け役兼仕切り役をしてもらいます。ワークショップでの議論の後には皆でポスター会場へ移動して、10 個のポスターを 1 人のディスカッサーが担当し、一つ一つポスターを周り、参加者とともに演者と議論を戦わしてもらいます。年季の入った研究者も初めて参加する学生も、皆が同じようにディスカッサーを相手に議論を戦わします。この時間には他の行事は一切入れません。大いに議論して下さい。ディスカッサーに指名された方は、ぜひともお引き受けいただき、年会を活気づけて下さい。

世界で初めて観察しているかもしれない現象が自分の目の前に現れる時、研究者の心はときめきます。目の前のデータが自然の謎の何を我々に語ってくれているのか、それをじっくり解き明かしていくのがサイエンスの醍醐味ではないでしょうか。そんな興奮を繰り返し味わいたくて研究を続けている人は多いと思います。若い参加者の中にもそのような思いをしている人もいるでしょうし、他人の発表からそのようなときめきを感じる人もいるのではないのでしょうか。私も年会で色々なサイエンスに出会えることを期待しています。

11 月に皆様と横浜でお目にかかれることを楽しみにしています。奮ってご参加下さい。

平成 26 年 4 月 1 日
第 37 回日本分子生物学会年会
年会長 小安 重夫

【プログラム】

◆シンポジウム (全 18 テーマ)

プログラム委員の名前を冠した 12 テーマのシンポジウムに加え、テーマ指定による 6 つのシンポジウムを開催いたします (24 頁参照)。

◆ワークショップ (全 50 テーマ)

会員より公募し採択された 50 テーマのワークショップを開催します (27 頁参照)。ワークショップの演者には、講演と併せて同日のポスターセッションでも発表を行っていただき、ディスカッサーを交えて、参加者と議論を深め

ていただきます。

◆一般演題（ワークショップ・ポスター）

7月1日(火)より、一般演題の投稿を受け付けます（17頁参照）。ワークショップでの採択演題を含めて、採択されたすべての一般演題は、ポスター発表を行っていただき、ディスカッサーを交えた討論を行っていただきます。

◆バイオテクノロジーセミナー

年会とセミナー主催者との共催によるセミナーをランチョンセミナーの形式で行います。

◆キャリアパス委員会企画

開催日時：11月26日(水) 11:45～13:00

11月27日(木) 11:45～13:00

会 場：両日とも第2会場（パシフィコ横浜会議センター3階・301）

ランチョンセミナーの形式で行います。

◆CSHA session: Frontiers in Computational Biology

年会と Cold Spring Harbor Asia との共催によるセッションを開催します。

開催日時：11月27日(木) 13:15～15:45

会 場：第17会場（パシフィコ横浜会議センター5階・503）

◆フォーラム

生命科学と関連する、しかし、シンポジウムやワークショップ形式にとらわれない、比較的自由度の高い企画を「フォーラム」と位置づけ、会員の皆様より企画を公募いたします。

募集要項は19頁の『フォーラム企画の公募について』をご参照ください（公募締切：2014年7月22日(火)）。

【年会企画】

◆海外若手研究者招聘企画

本年会では、昨年に引き続き、海外在住の若手研究者の旅費を補助します。補助金額はアジア在住者の場合10万円、欧米豪在住者の場合15万円とし、演題採択者のなかから厳正な審査によって決定いたします（応募状況と予算に応じ、数十名を採択予定）。

応募資格は、①分子生物学会の会員であること、②海外滞在期間2年以上（ポジション問わず）、③第36回年会で海外ポスドク招聘企画に採択された方は対象外とします。

旅費補助の採択・不採択に関わらず、演題採択された本企画応募者の参加登録費は免除となります。演題投稿締切後の演題取り下げは認められませんので、ご注意ください。

応募を希望される方は、7月1日(火)～7月31日(木)の期間中に、参加登録画面上の海外若手研究者招聘企画応募欄にチェックの上、必要事項を記入し、申し込んでください。採択通知は9月上旬を予定しております。

◆高校生研究発表

今年で3回目となる、高校生たちによる研究発表を行います。ぜひ、未来の分子生物学を担う高校生との交流を図り、激励の言葉をかけてください。

開催日時：11月27日(木) 16:15～18:15

会 場：パシフィコ横浜 展示ホール

◆若手研究者向けキャリア支援企画（予定）

過去年会で開催したリクルート企画を刷新し、研究職を目指す若手研究者のためのキャリア支援として、セミナー開催や企業紹介ブースの設置を行う予定です。博士課程前期、後期の学生やポスドク以上の若手研究者を対象に優れた研究者・企業人になるための情報を提供していきます。また、学部生や修士の学生にも、卒業後の将来に役立つノ

ウハウを提供したいと考えています。

【参加者へのご案内】

◆参加登録・演題投稿システム

今年の年会では、参加登録と演題投稿が一体となった、新しいシステムを導入します。

データ管理の都合上、演題投稿は必ず発表者に行っていただくことになりますので、ご注意ください。詳細は、15 頁の「参加登録について」、および 18 頁の「オンライン演題投稿方法」をご参照ください。

◆オンラインプログラム検索・要旨閲覧システム

一昨年から大幅な刷新を進めてきたプログラム検索・要旨閲覧システムは、オンラインシステムの一新に加え、今年からアプリ（iOS、Android）の導入が決定し、オフラインでも快適にプログラムや要旨の閲覧が可能になります。11 月上旬に公開予定です。ご期待ください。

◆プログラム集（冊子）

プログラムは 9 月下旬に年会ホームページ上で公開予定です。

なお、冊子体のプログラム集は、日本分子生物学会の会員には、参加登録の有無に関わらず、10 月末頃に学会事務局より事前送付されます。非会員の場合は、参加登録費に含まれるため、参加章（ネームカード）と共に年会事務局より事前送付いたします（当日登録の場合は、登録時にお渡しします）。また、残部がある場合には、年会会場にて一部 3,000 円で販売します。

◆保 育 室

お子さま同伴の参加者のために、会場内に保育室を設置します（一部本人負担）。ベビーシッター会社、保育室利用料金等の利用規定、最終締切日等の詳細は、9 月中旬頃に年会ホームページにてお知らせします。

◆親子休憩室

会場内に親子休憩室を設けます（授乳コーナー有）。予約は不要ですので、お子さまとご一緒の食事や休憩、あるいはオムツ換え等、自由にご利用ください。ただし、お子さま単独でのご利用はご遠慮ください（各自で昼食をご用意いただければ、シッターが保育室にてお子さまのお食事を補助いたします）。設置場所等詳細は、決定次第順次年会ホームページにてお知らせします。

◆年会期間中の宿泊予約

本年会のオフィシャルトラベルエージェントである㈱日本旅行が参加者の皆様の宿泊予約を受け付けます。詳しくは 38 頁に掲載の「宿泊申込のご案内」をご覧ください。その他お問い合わせは下記に直接ご連絡ください。

㈱日本旅行 西日本 MICE 営業部

「第 37 回日本分子生物学会年会」受付デスク

〒530-0001 大阪市北区梅田 1-11-4 大阪駅前第 4 ビル 5F

Tel：06-6342-0230/Fax：06-6342-0232 E-mail：wj_gakkai@nta.co.jp

（営業時間 平日…9：45～17：45 休業日…土日祝日）

【参加登録について】

事前参加登録期間：2014 年 7 月 1 日(火)～ 9 月 30 日(火) 17:00 (締切厳守)

※演題投稿受付期間とは異なりますのでご注意ください

◆登録方法

1. アカウントの取得

- 1) 年会ホームページの「参加登録」にアクセスし、「新規アカウントを申請する」というボタンから個人情報の入力画面に進み、必要事項を入力の上、「新規アカウントを申請する（仮登録を行う）」ボタンを押してください。
- 2) 入力いただいたメールアドレスへ、「本登録」を行うための仮登録完了確認メールが自動送信されます。
- 3) 確認メール文中の本登録用 URL をクリックすることで、「仮登録」から「本登録」となり、アカウント取得が完了し、事前参加登録画面に進みます。

2. 事前参加登録

1) 参加登録カテゴリ

参加登録カテゴリ（正会員、学生会員、非会員、学部学生、海外若手研究者招聘企画に応募）を選択してください。

2) 会員番号の入力

正会員、学生会員の方は会員番号（数字 6 桁）を入力してください。会員番号は会報送付時の宛名右下【括弧】内に記載されています。なお、会員番号が不明な場合は、日本分子生物学会事務局までお問い合わせください(Tel: 03-3556-9600、E-mail: info@mbsj.jp)。

・非会員の場合：「999999（9を6回）」と入力してください。

・入会手続き中の場合：「000000（0を6回）」と入力してください。

・会員番号が不明な場合：「888888（8を6回）」と入力してください。

※一般演題の投稿は、日本分子生物学会の会員であり、かつ本年度(2014年度)の会費を納入済みの方に限ります。
ご注意ください。

3) 本年度の会費の納入年月日

2014年度の日本分子生物学会会費を振り込んだ際の領収証（受領証）に記載されている受付日を入力してください。学会ホームページ上の会員専用ページ「会費納入ページ」でも、会費入金日を確認することができます。納入年月日を確認できない場合は、下記の通り入力してください。

・非会員の場合：

納入日に「2014 年 0 月 0 日」とご入力ください。

・払い込んだが領収証（受領証）の控えを紛失した場合：

納入日に「2014 年 1 月 3 日」とご入力ください。

・振込用紙の送付を依頼したが、参加登録時までに届かず、振込めなかった場合：

納入日に「2014 年 1 月 2 日」とご入力ください。会費は速やかにお振込みください。

・入会手続き中の場合：

納入日に「2014 年 1 月 1 日」とご入力下さい。手続き完了後、学会事務局から会費の請求書が送られてきますので、届き次第、お振込みください。

4) 参加章（ネームカード）送付住所

アカウント取得時に入力した住所とは別の住所へ参加章（ネームカード）の送付を希望する場合は、送付先の住所を入力してください。

5) 学部学生、海外若手研究者招聘企画応募者 証明書アップロード

学部学生の方は学生証のスキャンデータ、もしくは撮影画像をアップロードしてください。

海外若手研究者招聘企画へ応募する方は、該当欄に CV・在職を証明できるサイトの URL を登録してください。

6) 決済方法の選択

クレジットカード決済、または郵便振替を選択してください。

7) 登録完了

「登録する」ボタンを押すと参加登録が完了し、登録されたメールアドレスに、7桁の事前参加登録番号が記載された参加登録完了通知が自動送信されます。

8) 決 済

クレジットカード決済をする方は決済画面に進み、必要事項を入力の上、決済を完了してください。決済完了後、登録したメールアドレスに決済完了メールが自動送信されます。

郵便振替を選択された方は、後述の要領をご参照の上、指定の期日までに払込を完了してください。年会事務局で振込を確認後、登録されたメールアドレスに決済完了メールを送信いたします。

その他の操作方法詳細につきましては、サイト上の指示に従ってください。システムに関してご不明な点は年会事務局までお問い合わせください (Tel: 03-3230-2744、E-mail: mbsj2014@aeplan.co.jp)。

◆参加登録費支払方法

1. クレジットカード決済

オンライン参加登録時にクレジット決済が可能です。以下のクレジットカードによる決済が可能です。

VISA, MasterCard, JCB, American Express, Diners Club

2. 郵便振替

オンライン参加登録により発行された7桁の参加登録番号を、本会報に綴じ込みの払込取扱票の所定欄にご記入の上、お近くのゆうちょ銀行・郵便局よりお振込みください。郵便局に備え付けの振替用紙(青色)を使用される場合も、必ず予め参加登録番号を取得してください。

郵便振替口座	番 号: 00150 - 1 - 513387 名 称: 第 37 回日本分子生物学会年会
他行等から振り込む場合	店 名: 〇一九 (ゼロイチキユウ) 店 (019) 種 目: 当座 番 号: 0513387
参加費振込期限	<u>講演者、発表者: 2014 年 8 月 22 日(金)</u> <u>発表のない参加者: 2014 年 10 月 3 日(金)</u>
備 考	振込手数料は各自でご負担ください。

◆参加登録費

	事前参加登録 7月1日(火)～9月30日(火)	当日参加登録
正 会 員	8,500 円	10,500 円
学 生 会 員	4,500 円	6,500 円
非 会 員	11,500 円 (プログラム集含む)	13,500 円 (プログラム集含む)
学 部 学 生 (会員・非会員問わず)	学生証の提示により参加登録費無料	

- ・講演者、発表者は必ず事前参加登録を行ってください。
- ・事前参加登録締切後は、年会当日に会場にて当日参加登録を行ってください。
- ・事前参加登録は、オンライン参加登録を行った後、参加登録費の支払をもってはじめて登録が完了します。オンライン参加登録を行っていただいても、参加登録費のクレジットカード決済もしくは郵便振込が確認できない場合は、事前参加登録は無効となり、当日参加登録を行っていただくことになります。予めご了承ください。
- ・事前参加登録費を期日内にお支払いされた方には、11月初旬頃に参加章（ネームカード）を登録先の住所に郵送します。また、オンライン要旨閲覧システムのログインに必要な ID・パスワードを発行します。非会員には、プログラム集を同封します。
- ・参加章（ネームカード）を持たない方は、会場への入場はできません。
- ・一度納入された参加登録費は、理由の如何に関わらず一切返金いたしません。
- ・事前参加登録費の領収証は、参加章（ネームカード）と一緒に11月初旬に郵送いたします。原則として再発行はいたしませんので、ご了承ください。郵便振替にてお支払いをされる方は、念のため、ゆうちょ銀行・郵便局が発行する振込控を参加章の到着まで保管しておいてください。

【一般演題（ワークショップ・ポスター）募集について】

一般演題投稿受付期間：2014 年 7 月 1 日(火)～7 月 31 日(木) 17：00（締切厳守）

一般演題（ワークショップ・ポスター）、およびシンポジウム・ワークショップ指定演者の講演要旨受付は、インターネットで行います。

【演題投稿における注意事項】

- ・一般演題の投稿は、日本分子生物学会の会員であり、かつ本年度（2014 年度）の会費を納入済みの方に限ります。未入会の方は、予め日本分子生物学会の入会手続きを済ませてください。また、本年度の会費を未納の方は、お早めにお支払いください。
- ・演題投稿を行う前に、画面の表示に従い、事前参加登録を行ってください。
- ・演題投稿は必ず発表者が行ってください。プログラム集やオンライン要旨閲覧システムには、演題投稿者の名前が自動的に発表者として掲載されます。
- ・発表者として投稿できる演題数は、一人につき一演題のみです。シンポジウム・ワークショップの指定演者は、一般演題（ポスター・ワークショップ）には投稿できません。ただし、他の演題の共著者になることは差し支えありません。
- ・要旨は、日本語、英語の二つの言語でご準備ください。発表の言語は、ポスターは発表者に任せます。シンポジウムの講演言語は英語となります。ワークショップの講演言語は各オーガナイザーにより指定されます。発表に使用するポスターやスライドは、英語表記を推奨いたします。
- ・原則として演題投稿受付期間の延長はしません。また、締切後の新規投稿、投稿内容の修正などは原則として受け付けません。

◆オンライン演題投稿方法

1. 演題投稿方法

演題投稿システムは、今年から、参加登録システムと一体型の新しいシステムを採用しています。年会ホームページ上の「演題投稿」にアクセスし、画面の表示に従って、先にアカウントの取得と事前参加登録を行ってください（15頁「登録方法」を参照）。その後、画面上の「演題の新規登録を開始する」ボタンから演題投稿画面に進み、必要情報を入力してください。

システムに関してご不明な点は年会事務局までお問い合わせください（Tel：03-3230-2744、E-mail：mbsj2014@aeplan.co.jp）。

2. ポスター演題の投稿

発表分類一覧（21頁に掲載）より、第1希望、第2希望を選択してください。

3. ワークショップへの採択希望

全てのワークショップ企画で、一般演題から口頭発表の採択希望を募ります。採択希望者は「ワークショップターマール」(27頁に掲載)より、第1希望、第2希望のワークショップを選択してください。採否の選考は、各ワークショップ企画のオーガナイザー、およびプログラム委員会にて行い、9月上旬にメールにてご連絡します。

ワークショップに採択された演題も、全てポスター発表を併せて行っていただきますので、ご注意ください。

4. シンポジウム・ワークショップ指定演題の投稿

シンポジウム・ワークショップの指定演題の講演者には、6月上旬頃、年会事務局より、個別にメールにてシステムログイン用のID・パスワードをお送りします。システムへログインの上、7月31日(木)までに要旨の投稿を行ってください。ID・パスワードが不明な場合は、年会事務局までお問い合わせください（Tel：03-3230-2744、E-mail：mbsj2014@aeplan.co.jp）。

ワークショップの指定演者には、講演と併せてポスター発表を行っていただきますので、ご注意ください。

5. ポスター連続発表希望（ワークショップの採択希望演題を除く）

ワークショップの採択を希望しない一般演題においてのみ、複数演題とのポスター連続発表希望を受け付けます。連続発表を希望するすべての演題が投稿を終了した後に、年会ホームページの「連続発表登録」にアクセスし、一連の連続発表の代表者が演題の順序を申請してください。申請の際には、すべての演題の発表者氏名、演題の受付番号が必要となります。

6. 演題のタイトルと要旨の形式

演題のタイトルおよび要旨本文は、日本語・英語をご用意ください。日本語の要旨本文は、全角 850 文字、半角 1,700 文字以内で作成してください。英語の要旨本文は、半角 1,700 文字以内で作成してください。予め、文字数を制限以内に調整した原稿を用意し、それを投稿画面にコピー・ペーストするようにしてください。

7. 演題投稿受領通知

演題投稿後、登録したメールアドレス宛に受付番号を含む演題受領通知が送信されます。この通知は通常数分以内に到着しますが、もしこのメールが指定したメールアドレスに届かない場合は、演題登録が完了していない可能性があります。登録内容を確認後、完了していない場合は、再度登録をお願いします。

8. 投稿内容の修正

演題投稿受付期間中は、演題投稿・事前参加登録システムにログインすることにより、演題投稿画面から投稿内容の修正を行うことができます。修正回数に制限はありません。内容を更新するたびに、更新内容がメールで通知されますのでご確認ください。投稿受付締切後の演題修正は原則として受け付けません。ギリシャ文字、斜体、上付き、下付き、数式などは、細心の注意を払って確認してください。

9. 演題の取消

既に登録した演題を取消したい場合は、前述と同様の方法で演題投稿画面にログインし、「この演題の登録を取り消す」を選択して演題を取消してください。投稿受付締切後の演題取消は原則として受け付けません。

10. 著者氏名のアルファベット表記

著者の名寄せは、入力されたアルファベット表記をもとにソートをかけて行われます。従って、同一人物であっても、入力されたアルファベット表記が異なる場合は、同一人物として認識されません。複数の演題の著者となっておられる場合には、ご注意ください。

11. ポスター演題の採否通知

9月上旬頃にメールにてご連絡します。なお、演題の採否、発表日についてはご一任願います。

【フォーラム企画の公募について（応募締切：2014年7月22日(火)）】

生命科学と関連する、しかし、シンポジウムやワークショップ形式にとらわれない、比較的自由度の高い企画を「フォーラム」と位置づけ、1テーマ1時間30分の時間枠（19:15～20:45）で、会員の皆様より企画を公募いたします。奮ってご応募ください。

◆応募要領

下記事項を明記のうえ、7月22日(火)までに年会事務局宛、E-mailにてご提出ください（E-mail：mbsj2014@aeplan.co.jp）。

- 1) フォーラムのタイトル（和文・英文）
- 2) 2名のオーガナイザーの氏名・所属（和文・英文）
- 3) 概要（400字程度）
- 4) 予定演者の氏名・所属
- 5) 希望する部屋の規模（大（340-400席）・中（170-210席）・小（100-130席））

【全体日程表（予定）】

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
11月25日（火）	シンポジウム 9:00-11:30 パネライセミナー 12:00-13:00 ワークショップ 13:15-15:45 フォーラム 19:15-20:45 貼付 ポスター討論 16:15-19:15 撤去 機器・試薬・書籍展示 10:00-19:15												
11月26日（水）	シンポジウム 9:00-11:30 パネライセミナー 12:00-13:00 キャリアパス委員会企画 11:45-13:00 ワークショップ 13:15-15:45 フォーラム 19:15-20:45 貼付 ポスター討論 16:15-19:15 撤去 機器・試薬・書籍展示 10:00-19:15 総会・富澤基金贈呈式 19:15-20:45												
11月27日（木）	シンポジウム 9:00-11:30 パネライセミナー 12:00-13:00 キャリアパス委員会企画 11:45-13:00 ワークショップ 13:15-15:45 フォーラム 19:15-20:45 貼付 ポスター討論 16:15-19:15 撤去 機器・試薬・書籍展示 10:00-19:15 撤去												

※あくまで2014年5月時点での予定であり、今後変更される場合があります。

【ポスター発表分類一覧】

大 項 目		小 項 目	
1	分子構造・生命情報	a	ゲノム・遺伝子・核酸
		b	タンパク質
		c	糖・脂質
		d	生理活性物質
		e	オミクス
		f	分子進化
		g	その他
2	分子・複合体の機能	a	DNA 複製
		b	組換え・変異・修復
		c	エピジェネティックス
		d	転写
		e	RNA・RNP
		f	翻訳
		g	その他
3	細胞の構造と機能	a	染色体・核内構造体
		b	細胞質オルガネラ
		c	細胞接着・細胞運動・細胞外基質
		d	タンパク質プロセッシング・輸送・局在化
		e	生体膜・細胞骨格
		f	細胞増殖・分裂・周期
		g	シグナル伝達
		h	細胞死
		i	その他
4	発生・再生	a	初期発生
		b	器官・形態形成・再生
		c	幹細胞・細胞分化
		d	生殖
		e	神経発生
		f	その他
5	高次生命現象・疾患	a	脳・神経系
		b	免疫
		c	感染
		d	老化
		e	がん
		f	代謝
		g	遺伝性疾患
		h	その他
6	方法論・技術	a	核酸工学・ゲノム編集
		b	タンパク質工学
		c	細胞工学・発生工学
		d	ケミカルバイオロジー
		e	病因解析・診断
		f	バイオインフォマティクス
		g	その他
7	その他	a	その他

【シンポジウム・ワークショップ日程表】

建物	フロア	会場名	部 屋	11月25日(火) 第1日目		11月26日(水) 第2日目	
				9:00～11:30	13:15～15:45	9:00～11:30	13:15～15:45
パシフィコ横浜 会議センター	1階	第1会場	メインホール	1S1 老化・寿命と老化関連疾患の分子生物学 西田 栄介 / 原 英二		2S1 幹細胞のプログラミング / リプログラミング 斎藤 通紀	
	3階	第2会場	301	1S2 腸内フローラと宿主の生理・病理 大野 博司 / 大谷 直子	1W2 サーフェスバリア・共生と感染 辻 典子 / 太田 訓正	2S2 こころの分子生物学 内匠 透	2W2 多角的アプローチによるゲノム機能の包括的理解 井上 聡 / 藤井 穂高
		第3会場	302	1S3 生命システムの階層性に構成アプローチで挑む：複合的な視点による深化 木賀 大介 / 杉村 薫	1W3 ケミストリーを戦略としたシグナル伝達研究 井上 純一郎 / 袖岡 幹子	2S3 環境適応につながる多様な分子基盤 渡邊 雄一郎	2W3 ユビキチンをはじめとした翻訳後修飾によるタンパク質の機能・動態変換 岩井 一宏 / 村田 茂穂
		第4会場	303		1W4 生命の起源・進化・本質 横堀 伸一 / 別所 義隆		2W4 生体酸素ダイナミクスの感知・応答研究の最先端 南学 正臣 / 田久保 圭誉
		第5会場	304		1W5 TOR シグナリング：メカニズムと生理 丑丸 敬史 / 前田 達哉		2W5 システムワイド計測とバイオインフォマティクス 岩崎 渉 / 城口 克之
		第6会場	311+312		1W6 神経系の機能とその破綻 星野 幹雄 / 深田 優子		2W6 転移因子とゲノム・エピゲノムダイナミクス 一柳 健司 / 佐瀬 英俊
		第7会場	313+314		1W7 原生生物～モデル生物としての大いなる可能性を探る～ 福田 康弘 / 岩本 政明		2W7 幹細胞から様々な機能細胞を分化誘導する試み 原 孝彦 / 桑 昭苑
		第8会場	315		1W8 タンパク質合成装置リボソームをハブとする遺伝子発現制御機構の新展開 稲田 利文 / 山下 暁朗		2W8 遺伝性疾患の分子病態：分子機能から高次生命機能へ 菅澤 薫 / 高田 穣
		第9会場	411+412		1W9 ゲノムダイナミクスとゲノムホメオスタシスの分子機構 太田 邦史 / 篠原 美紀		2W9 免疫受容体による細胞間コミュニケーションの新しい地平線 深井 周也 / 前仲 勝実
	4階	第10会場	413		1W10 機能性 RNA 分子研究の新展開 武藤 裕 / 牛田 千里		2W10 動物および植物のスケールアップ成長：細胞、器官、個体をつなぐサイズと形態のコントロール 西村 隆史 / 上村 匡
		第11会場	414+415		1W11 細胞超分子が紡ぐ生命の仕組み 清末 優子 / 渡邊 直樹		2W11 生態進化発生学(Eco-Evo-Devo)とは言うけども 入江 直樹 / 荻野 肇
		第12会場	416+417		1W12 周期的再生における幹細胞とその環境 岩淵 徳郎 / 松崎 貴		2W12 オルガネラストレスが紡ぐ生活習慣病 稲城 玲子 / 吉田 秀郎
		第13会場	418		1W13 初期発生を制御する分子・細胞ダイナミクス 佐々木 洋 / 藤森 俊彦		2W13 人工デザインによる分子認識の最前線 ― Scaffold を中心として ― 久保 泰 / 根本 直人
		第14会場	419		1W14 卵抽出液・無細胞系ならできる、こんなこと 持田 悟 / 新富 圭史		2W14 動植物における生殖戦略とその分子基盤 北野 潤 / 渡辺 正夫
		第15会場	501	1S15 個体の恒常性維持における臓器連関 竹田 秀	1W15 真核細胞核内の転写制御とクロマチン制御のクロストーク 大熊 芳明 / 伊藤 敬	2S15 膜蛋白質の体系的構造機能解析技術の確立に向けて 瀧木 理 / 山下 敦子	2W15 DNA 修復プロセッシングとゲノムダイナミクス 中別府 雄作 / 石川 冬木
	5階	第16会場	502	1S16 ゲノム再生 小林 武彦	1W16 ゲノム編集による哺乳類遺伝学の革命と生命科学の新展開 山本 卓 / 畑田 出穂	2S16 動物発生における細胞・組織のコミュニケーション 高橋 淑子	2W16 がんの代謝の分子メカニズム 曾我 朋義 / 佐谷 秀行
		第17会場	503	1S17 細胞の中で膜が動き、ちぎれ、融合し、いのちが紡がれる 吉森 保	1W17 分子生物学の新技術から捉えた「生老病死」の最前線 田中 知明 / 南野 徹	2S17 代謝とエピジェネティクスの分子交差点 吉田 稔	2W17 クロマチンのエピジェネティック制御と創薬 胡桃坂 仁志 / 米田 悦啓
		第18会場	511+512		1W18 細胞内共生した生物や環境ウイルスのゲノム進化 橋本 哲男 / 武村 政春		2W18 生命の3大ドメインの分子生物学から考察する遺伝情報制御系の原型 金井 昭夫 / 石野 良純

＜セッション番号について＞ 開催日＋シンポジウム (S) / ワークショップ (W) ＋会場

(例) 2W13：第2日目・ワークショップ・第13会場

＜講演言語について＞ **J**日本語・**E**英語・**J/E**演者が選択

建物	フロア	会場名	部 屋	11月27日(木) 第3日目	
				9:00 ~ 11:30	13:15 ~ 15:45
パシフィコ横浜 会議センター	1階	第1会場	メインホール	3S1 非コード RNA の分子生物学とその応用 塩見 美喜子	
	3階	第2会場	301	3S2 生存戦略としての幹細胞形成と器官再生 杉本 慶子 / 長谷部 光泰	3W2 マルチサブユニット複合体の構造と機能の解析 堀越 正美 / 西村 善文
		第3会場	302	3S3 進化と多様性 石野 史敏 / 梅園 良彦	3W3 ノンコーディング RNA による細胞内プロセス制御 中川 真一 / 石井 浩二郎
		第4会場	303		3W4 生命活動を支える高次複合体の動態と機能 千葉 志信 / 大橋 英治
		第5会場	304		3W5 ゲノム DNA 複製制御のメカニズム：生物種を超えた統一像と多様性 正井 久雄 / 升方 久夫
		第6会場	311+312		3W6 分子生物学の発展に貢献する次世代ハイオミケーシング技術の最前線 大嶋 佑介 / 片桐 崇史
		第7会場	313+314		3W7 がん幹細胞のダイナミクス 後藤 典子 / 北林 一生
		第8会場	315		3W8 個体で観るエピジェネティクスの最前線 近藤 隆 / 磯野 協一
		第9会場	411+412		3W9 植物細胞に眠るフロンティア：オルガネラ研究のすすめ 植村 知博 / 濱田 隆宏
	4階	第10会場	413		3W10 細胞周期を通じた染色体恒常性制御機構のニューフロンティア 田中 耕三 / 藤田 雅俊
		第11会場	414+415		3W11 組織恒常性を維持する適者生存—細胞の競合と協調— 倉永 英里奈 / 井垣 達史
		第12会場	416+417		3W12 脊椎動物の性分化分子機構 黒岩 麻里 / 高田 修治
		第13会場	418		3W13 Notch シグナル～その多様性と普遍性～ 松野 健治 / 北川 元生
		第14会場	419		3W14 多様な DNA 損傷応答の統合制御機構 中田 慎一郎 / 柴田 淳史
		第15会場	501	3S15 対称・非対称分裂による細胞運命決定と組織恒常性維持 豊島 文子	3W15 クロマチン・染色体・細胞核のダイナミクス 菊池 裕 / 佐渡 敬
	5階	第16会場	502	3S16 エピゲノム異常が絡む疾患 白髭 克彦	3W16 代謝恒常性の変容と生活習慣病 尾池 雄一 / 真鍋 一郎
		第17会場	503	3S17 染色体分配の分子メカニズム 渡邊 嘉典	CSHA session: Frontiers in Computational Biology
		第18会場	511+512		3W18 「食」と「カラダ」の相互作用：メタゲノミクスからニュートリゲノミクスまで 山田 拓司 / 矢作 直也

＜セッション番号について＞ 開催日＋シンポジウム (S) / ワークショップ (W) ＋会場
(例) 2W13: 第2日目・ワークショップ・第13会場

＜講演言語について＞ **J** 日本語・**E** 英語・**J/E** 演者が選択

【シンポジウムテーマ一覧】

※セッション番号について：開催日＋シンポジウム（S）＋会場

（例）1S16：第1日目・シンポジウム・第16会場

※講演言語について：シンポジウムの講演言語はすべて英語となります

1S1. テーマ指定 企画 老化・寿命と老化関連疾患の分子生物学

Molecular Biology of Aging and Age-Related Disorders

オーガナイザー：西田 栄介（京都大学）／原 英二（がん研究所）

老化し死ぬことは一部の生物を除く全ての生物にとって不可避の帰着点である。老化の過程は非常に多様性に富んでおり、そのメカニズム解明は生物学上の根幹的未解決問題の一つである。老化速度（少なくとも一部）が、遺伝子により制御されていることが明らかになってから、個体や細胞の老化から老化関連疾患に至る様々な老化に関する知識が蓄積されている。本シンポジウムでは様々な視点から解明されつつある老化について議論を行いたい。

1S2. テーマ指定 企画 腸内フローラと宿主の生理・病理

Gut Microbiota on the Host Physiology and Pathology

オーガナイザー：大野 博司（理化学研究所）／大谷 直子（東京理科大学）

ヒトを含む動物の腸内には膨大な数の共生細菌、腸内フローラが棲息している。腸内フローラはビタミンや必須アミノ酸などの供給や宿主免疫系の賦活などの有益作用を持つ反面、そのバランスの破綻は、炎症性腸疾患などの腸疾患のみならず、肥満や糖尿病、動脈硬化症などの生活習慣病や肝炎・肝がんや多発性硬化症などの脳神経疾患との関連も指摘されている。本シンポジウムではこのような腸内フローラの作用について議論する。

1S3. テーマ指定 企画 生命システムの階層性に構成アプローチで挑む：複合的な視点による深化

Synthetic Study to Uncover Hierarchical Ordering of Biological Systems

オーガナイザー：木賀 大介（東京工業大学）／杉村 薫（京都大学）

定量的測定に基づいたモデルを、生命の階層性を意識した構成アプローチによって確認する。近年の技術的な進展により、生物学においても他の諸分野と同様に、古典的な再構成実験の時代に萌芽があったこの研究の流れが深まりつつある。本シンポジウムでは、新規測定手法、定量生物学、数理生物学、合成生物学についての講演を通じ、生命システムの諸階層の間をつなぐための複合的な視点による今後の生物学の開拓について議論したい。

1S15. 竹田 秀 企画 個体の恒常性維持における臓器連関

Interacting Organ Systems Governing Whole Body Homeostasis

オーガナイザー：竹田 秀（東京医科歯科大学）

近年の分子生物学、遺伝学等の発展により、生理機能や病態の分子レベルでの理解が大きく進展した。その一方、個体レベルでの恒常性維持には細胞間、システム間、臓器間の高次ネットワークによる情報伝達機構が重要であることが明らかとなってきた。本シンポジウムでは、個体の恒常性維持を担う、様々な階層の制御機構について議論したい。

1S16. 小林 武彦 企画 ゲノム再生

Regeneration of Genome

オーガナイザー：小林 武彦（国立遺伝学研究所）

35億年前に地球に生まれた最初の細胞は、現在も人類を始めすべての生物の体の中で脈々と生きている。化学的に脆弱である遺伝物質DNAは、常に改変、崩壊の危機にさらされてきたが、細胞はDNAを修復、再生する能力を獲得し、進化しつつも維持されてきた。そのゲノムの再生能力は生命の連続性を保証するだけでなく、iPSなどの夢の医療をも可能にする。本シンポジウムではゲノム再生機構とその未来像について議論する。

- 1S17. 吉森 保 企画 細胞の中で膜が動き、ちぎれ、融合し、いのちが紡がれる
Inside Cells, Membranes Move, Fission, and Fuse to Maintain Life
オーガナイザー：吉森 保（大阪大学）

2013 年のノーベル医学生理学賞の対象となった小胞輸送研究は今や、高度に統合管理された物流ネットワーク、生体機能と密接に関係したオルガネラの変幻自在の形態変化、オルガネラ間相互作用などの多彩な研究に発展している。ノーベル賞受賞者達が 30 年前に切り拓いた細胞内膜ダイナミクス分野の現在の到達点を紹介する。

- 2S1. 斎藤 通紀 企画 幹細胞のプログラミング／リプログラミング
Programming/Reprogramming Stem Cell Fate
オーガナイザー：斎藤 通紀（京都大学）

幹細胞を起点とした再生医療の実現には、幹細胞の分化・増殖機構及び関連する細胞系譜の発生機構の理解が必須の基盤となる。本シンポジウムでは幹細胞の programming/reprogramming 機構と分化制御に関する第一線の研究者を招聘し、細胞形質制御機構・技術の最前線を議論したい。

- 2S2. 内匠 透 企画 こころの分子生物学
Molecular Biology of Brain and Mind
オーガナイザー：内匠 透（理化学研究所）

脳（こころ）を理解する上で分子生物学的手法だけのアプローチには限界があることは確かであるが、そのことを理解した上で、細胞レベル、回路・個体レベル、さらにはその病態との関連を分子の視点で研究している方々に登壇いただき、普段神経科学とは無縁の分子生物学者にも脳科学の包括的な最近の動向を知っていただけるようなものを提供する。

- 2S3. 渡邊 雄一郎 企画 環境適応につながる多様な分子基盤
Diverse Gene Regulation Systems for Environmental Adaptation
オーガナイザー：渡邊 雄一郎（東京大学）

生物は周囲の環境の変化に常にさらされる中で、多様な遺伝子発現の切り替えをしながら生きている。さまざまな環境変化に対する適応に関連して、さまざまな制御機構があきらかとなってきた。本シンポジウムでは、動物植物共通にみられる体内時計のシステムがどのような制御を受けるかを例に考える。必要な分子種が入れ替わる際に“不要”となった mRNA を分解する系、RNA プロセッシング装置、クロマチン状態の変化など生物種をこえて多彩な制御系が知られるようになった。研究対象を越えて、さまざまな生物種で見いだされた事例を知り合う場とする。

- 2S15. テーマ指定 企画 膜蛋白質の体系的構造機能解析技術の確立に向けて
Towards Establishment of Systematical Structure-Function Analysis Technology of Membrane Proteins
オーガナイザー：濡木 理（東京大学）／山下 敦子（岡山大学）

膜蛋白質は、細胞膜を介したシグナル伝達や物質輸送などの重要な機能を担うため、主要な創薬ターゲットでもある。しかし、その構造解析はきわめて難しく、立体構造に基づいた医薬分子設計の進展を遅らせるボトルネックになっている。そこで本ワークショップでは、創薬標的膜蛋白質に対する最新の構造機能解析技術とその成功例を紹介し、本領域の研究加速の重要性と打開策について議論したい。

- 2S16. 高橋 淑子 企画 動物発生における細胞・組織のコミュニケーション
Cell- and Tissue Communications during Development
オーガナイザー：高橋 淑子（京都大学）

個体発生における形作りを理解するためには、個々の細胞の振る舞いや細胞同士のコミュニケーション、そして組織や器官の間で働く相互作用など、階層横断的な視野が有効である。本シンポジウムでは国内外の研究者を交えて、細胞の移動、3次元組織の形態形成、体のパターンニング、幹細胞とニッチなど、発生を考える上での本質的原理に迫る。また Eco-Devo（生態→発生）に向けた新しい挑戦も交え、異なる分野のバイオリジストとの積極的な融合を図りたい。

2S17. 吉田 稔 企画 代謝とエピジェネティクスの分子交差点
At the Molecular Crossroad of Metabolism and Epigenetics
オーガナイザー：吉田 稔（理化学研究所）

エピジェネティクス制御の中心を担うアセチル化、メチル化等のヒストン修飾酵素の働きは、修飾基ドナーであるアセチル CoA、S-アデノシルメチオニン（SAM）をはじめとして多様な生体内の一次代謝産物や栄養ストレスによって制御されていることが明らかになってきた。代謝とエピジェネティクスの相互作用は、時として次世代に継承されることから大きな注目を集めている。栄養ストレスなどの環境要因でエピジェネティクスが変化するメカニズムとエピジェネティクス異常が代謝疾患につながるメカニズムという双方向からのアプローチに焦点を当て、慢性疾患に至るエピジェネティクス機構について議論する。

3S1. 塩見 美喜子 企画 非コード RNA の分子生物学とその応用
Molecular Biology of Non-coding RNAs and its Application
オーガナイザー：塩見 美喜子（東京大学）

生命の複雑さをタンパク質と同じ座標で制御する Non-coding RNA の研究は急速に展開している。しかし、Non-coding RNA の種類の多さに加え、生物間の保存性の低さ、特定のパートナータンパク質と RNP 複合体を形成してはじめて機能を獲得するといった特異な性状などが本研究をより複雑なものとしており、今後、さらなる新しい切り口が望まれる。本シンポジウムでは、Non-coding RNA の Basic Science のみならず、CRISPR をはじめとした革新的な新技術・新実験手法の開発、応用にも焦点をあて研究をすすめている国内外の研究者に講演していただくとともに、今後の展望を考える場としたい。

3S2. テーマ指定 企画 生存戦略としての幹細胞形成と器官再生
Stem Cell Production and Organ Regeneration as an Adaptive Reprogramming Strategy
オーガナイザー：杉本 慶子（理化学研究所）／長谷部 光泰（基礎生物学研究所）

傷害などのストレスによって失った組織や器官を修復・再生する現象は、動植物を問わず広く生物界に見られ、各種生物の生存戦略として非常に重要である。再生過程には、傷害部位において多様な細胞種を新しく生み出す幹細胞の存在が必須だが、幹細胞をどう形成するか、傷害部位で細胞増殖をどう再開するか等、その分子機構の多くが未解明である。本シンポジウムでは様々な動植物の幹細胞形成、再生に関する最新の知見を紹介し、今後の展開について議論する。

3S3. テーマ指定 企画 進化と多様性
Biological Evolution and Diversity
オーガナイザー：石野 史敏（東京医科歯科大学）／梅園 良彦（兵庫県立大学）

「進化と多様性」は生物学の基盤であり、その時代ごとに様々な分野からのアプローチが試みられ、新しい概念が生み出されてきた。今、この問題はどのように捉えることができるのだろうか？ 本シンポジウムでは、総合科学の面からこの問題をとらえ、発生生物学、集団遺伝学、エピジェネティクス、ゲノム科学などの分野からユニークなアプローチを展開しておられる研究者の講演をもとに、そこから見えてくる新しい進化像について、会場の皆さんと熱い討論をしたい。

3S15. 豊島 文子 企画 対称・非対称分裂による細胞運命決定と組織恒常性維持
Cell Fate Decision and Tissue Homeostasis by Symmetric and Asymmetric Cell Division
オーガナイザー：豊島 文子（京都大学）

細胞の対称分裂、非対称分裂振り分け機構は、幹細胞の運命決定や組織構築に重要である。本シンポジウムでは、対称・非対称分裂を決定するメカニズムと、それがどのようにして細胞運命さらには組織構築に貢献するかについて、様々なモデル生物を用いた研究を紹介していただき、このメカニズムの共通性と特異性について議論する。

3S16. **白髭 克彦 企画** エピゲノム異常が絡む疾患

Epigenetic Dysregulation and Disease

オーガナイザー：白髭 克彦（東京大学）

エピゲノム制御は生命の維持、継承に関わる様々な生物学的システムの根幹にある。本シンポジウムではエピゲノム制御異常が絡む疾患として、小児の分化発生異常関連疾患及び癌を取り上げ、これら疾患の解析を通して明らかとなりつつある新規の制御プロセスから創薬ターゲットまで幅広い話題を提供する。

3S17. **渡邊 嘉典 企画** 染色体分配の分子メカニズム

Molecular Mechanisms of Chromosome Segregation

オーガナイザー：渡邊 嘉典（東京大学）

染色体分配の異常は染色体の異数性をもたらし、細胞のがん化およびその悪性化を促進すると考えられている。染色体分配の基本的な分子機構のさらなる理解を深めることにより、がん細胞などでみられる染色体分配異常の原因について議論する。

【ワークショップテーマ一覧】

※セッション番号について：開催日＋ワークショップ（W）＋会場

（例）2W8：第2日目・ワークショップ・第8会場

※講演言語について：**J**日本語・**E**英語・**J/E**演者が選択

1W2. サーフেসバリア・共生と感染

J/E

Symbiosis, infection and regeneration at the surface barrier

オーガナイザー：辻 典子（産業技術総合研究所）／太田 訓正（熊本大学）

【5. 高次生命現象・疾患—b. 免疫、c. 感染】

共生細菌は抗炎症や細胞の脱分化を誘導するなど、予期しなかった役割を持っています。感染は炎症と組織障害をもたらしたのち、やはり速やかな再生過程を誘導します。次世代再生医療と予防医学が注目を集める中、本ワークショップでは共生（インテグリティ）への生命体のかけひきと新たな分子生物学を知りうる討論を行い、それらを保健・医療に活かす術を探っていきます。

1W3. ケミストリーを戦略としたシグナル伝達研究

J

Molecular analysis of signal transduction based on the chemical strategies

オーガナイザー：井上 純一郎（東京大学医科学研究所）／袖岡 幹子（理化学研究所）

【6. 方法論・技術—d. ケミカルバイオロジー】

シグナル伝達の厳密な制御は生体の恒常性維持に極めて重要であり、その制御破綻は多くの疾患発症を誘導する。しかし、疾患予防や治療方法を開発するためには従来の分子生物学的解析では十分でなく、多様な異分野との連携によるシグナル研究が必要である。本ワークショップでは、中でも特にシグナルを修飾や操作できる化合物を用いたケミストリーを武器にシグナル伝達を分子レベルで解明する研究の重要性を様々な角度から議論する。

1W4. 生命の起源・進化・本質

J

Origin, evolution and the true nature of life

オーガナイザー：横堀 伸一（東京薬科大学）／別所 義隆（理化学研究所）

コーディネーター：田村 浩二（東京理科大学）／大島 泰郎（共和化工株式会社）

【1. 分子構造・生命情報—f. 分子進化】

分子生物学の進展は、地球上の生物が基本的に同じ作用機序のもとに動いていることを明らかにしてきた。本ワークショップの前半では、エネルギー代謝に焦点を当て、発酵・呼吸・原始光合成など、生物が如何に代謝有機物にエネルギーを変換する機能を獲得したかを検討する。また後半では、ミクロからマクロにわたり、様々な生命現象を起源の立場から俯瞰していく。これらの議論から、生命がどのような基盤のもとに生まれ、進化してきたかを考えていく。

1W5. TOR シグナリング：メカニズムと生理

J/E

TOR signaling: mechanism and physiology

オーガナイザー：丑丸 敬史（静岡大学） / 前田 達哉（東京大学）

【3. 細胞の構造と機能—g. シグナル伝達】

免疫抑制剤／抗癌剤ラパマイシンの標的分子として同定された TOR キナーゼは、細胞成長を制御する経路の中核を担うシグナル伝達因子である。TOR キナーゼ複合体の活性制御機構と標的基質については近年急速に解明が進み、それに伴って広汎な生理機能の詳細が明らかにされつつある。本ワークショップでは、広がり続ける TOR 研究の最前線を紹介し、諸分野におけるこの重要なシグナル伝達因子の役割について議論を深めたい。

1W6. 神経系の機能とその破綻

J/E

Function and pathology of the nervous system

オーガナイザー：星野 幹雄（国立精神神経医療研究センター 神経研究所） /

深田 優子（自然科学研究機構 生理学研究所）

【5. 高次生命現象・疾患—a. 脳・神経系】

高次機能を担う脳神経系は極めて複雑かつ精巧な組織であるが、そこにはほころびが生じると、様々な精神・神経疾患の原因となる。本ワークショップでは、脳神経系の発生・構造・機能に関する基礎研究と、その破綻による精神・神経疾患の病態研究について扱う。

1W7. 原生生物～モデル生物としての大いなる可能性を探る～

J

The potential of protists as next model organisms for molecular biology

オーガナイザー：福田 康弘（東北大学） / 岩本 政明（情報通信研究機構）

【6. 方法論・技術—g. その他】

原生生物とは、多細胞動植物と酵母を除いた全ての真核生物を表す総称である。そこにはあらゆる分類系統に属する単細胞生物が含まれており、従来のモデル生物にはないユニークな生物種と、興味深い生命現象の宝庫と考えられる。本ワークショップでは、原生生物を研究対象とする研究者に、各種原生生物の特徴を生かした研究例を紹介していただき、新たなモデル生物としての原生生物の魅力と可能性について皆様と議論を深めたい。

1W8. タンパク質合成装置リボソームをハブとする遺伝子発現制御機構の新展開

J

Ribosome: Protein synthesis machinery and a hub for gene regulation

オーガナイザー：稲田 利文（東北大学） / 山下 暁朗（横浜市立大学）

【2. 分子・複合体の機能—f. 翻訳】

リボソームは単なるタンパク質合成装置ではなく、精密に翻訳反応自体を制御することで、適正なフォールディングを保証する。翻訳伸長反応の厳密な制御は正常な遺伝子機能に重要であり、細胞の保持する品質管理が翻訳異常を認識し、異常な mRNA とタンパク質を排除することで機能不全の有害なタンパク質の産生が抑制される。また、シグナル伝達機構による翻訳調節機構と環境応答における生理的意義の理解も急速に進んでいる。本ワークショップでは遺伝子発現制御のバブとしてのリボソームの新規機能と翻訳制御の分子機構について最新の知見を紹介したい。

1W9. ゲノムダイナミクスとゲノムホメオスタシスの分子機構

J

Molecular mechanism of genome dynamics and genome homeostasis

オーガナイザー：太田 邦史（東京大学） / 篠原 美紀（大阪大学）

【2. 分子・複合体の機能—b. 組換え・変異・修復】

ゲノム DNA は生命の設計図でありゲノム・染色体はその情報媒体としての機能から、その安定化維持は必須である。一方で、ゲノム・染色体ダイナミクスは細胞機能と密接に関わっており柔軟な構造体としての一面も持つ。さらに、ゲノム再編など多様なゲノム DNA ダイナミクスは発がん等疾患の原因となる一方で、生命機能の多様性創出に重要である。本ワークショップでは多様なゲノム機能とそれを司る分子機構、その生物学的意義について議論したい。

1W10. 機能性 RNA 分子研究の新展開

J/E

Recent research development of functional RNA molecules

オーガナイザー：武藤 裕（武蔵野大）／牛田 千里（弘前大学）

【2. 分子・複合体の機能—e. RNA・RNP】

RNA 分子の多くは単独で、あるいはタンパク質と複合体を形成して特徴的な二次構造や立体構造をとり、機能の多様性を生み出している。本ワークショップでは RNA-タンパク質複合体の動作原理にせまる最新の構造生物学的研究を紹介するとともに、今後そのような研究の展開が期待される structured RNA についての話題を提供する。RNA/RNP 機能と構造の多様性を知ること、RNA を介した新たな生体制御システムの発見と理解につなげたい。

1W11. 細胞超分子が紡ぐ生命の仕組み

E

Mechanisms of life woven from supramolecular networks

オーガナイザー：清末 優子（理化学研究所）／渡邊 直樹（東北大学）

【3. 細胞の構造と機能—e. 生体膜・細胞骨格】

生命は生体分子の相互作用が織りなすシンフォニーだ。生体膜や細胞骨格をはじめとする細胞超分子は、分散と集合を繰り返し、変幻自在に生体の形づくりやシグナル伝達を具現化する。近年の、マルチスケール、マルチレベルな細胞超分子の機能解析は、ナノスケールでの分子の振る舞いが如何にして生命を紡いでいるのか、その全体像を明らかにしつつある。本ワークショップでは、先端技術駆使して、個体の発生や形態形成、病態における超分子の新機能の発見をもたらした、最近のトピックスを紹介する。

1W12. 周期的再生における幹細胞とその環境

J

Stem cell and tissue microenvironment for cyclic regeneration

オーガナイザー：岩渕 徳郎（東京工科大）／松崎 貴（島根大学）

【4. 発生・再生—c. 幹細胞・細胞分化】

生体の周期的再生には毛髪、皮膚（表皮）、消化管の再生などがあり、幹細胞やその関連分子、適した微小環境の存在が重要と考えられる。この時、幹細胞はどのような分子と関連しながら分化していくのか大きな課題である。最近では iPS 細胞の周期的再生への応用も大変興味深い事柄である。本ワークショップでは、生体の周期的再生における幹細胞や微小環境の最新の研究動向を共有し、今後の研究の方向性や可能性について議論したい。

1W13. 初期発生を制御する分子・細胞ダイナミクス

J/E

Cellular and Molecular Dynamics regulating Embryogenesis

オーガナイザー：佐々木 洋（熊本大学）／藤森 俊彦（基礎生物学研究所）

【4. 発生・再生—a. 初期発生】

受精卵から基本的なボディプランを形成する初期発生は、細胞の分化、増殖、形態形成等、多くの現象が起きるダイナミックな過程である。これまでの研究により、これらの現象にかかわる、遺伝子や分子の役割が明らかにされてきたが、近年、これら分子や個々の細胞の動態が理解されつつあり、さらに物理的な力といった新たな因子の関与も明らかにされてきた。本ワークショップでは、このように分子・細胞の挙動の理解や、力など、新たな視点からの研究を取り上げる。

1W14. 卵抽出液・無細胞系ならできる、こんなこと

J

Make it possible with egg extracts and cell-free systems

オーガナイザー：持田 悟（熊本大学）／新冨 圭史（理化学研究所）

【3. 細胞の構造と機能—i. その他】

カエル卵抽出液に代表される無細胞系では様々な細胞内現象を試験管内で再現できる。近年では、解析技術の進歩と相まって、その利用範囲が拡大している。本ワークショップでは、卵・細胞抽出液の無細胞系だからこそなし得た研究の醍醐味にフォーカスし、細胞周期、DNA 複製、オルガネラ動態、核の初期化など多彩な話題を取り上げたい。無細胞系の歴史や「意外にも簡単な」調製法にも触れ、この系に馴染みのない人でも実験のヒントを見つけ出せる場としたい。

1W15. 真核細胞核内の転写制御とクロマチン制御のクロストーク

E

Crosstalks between Transcription Regulation and Chromatin Regulation in Eukaryotic Cell Nucleus

オーガナイザー：大熊 芳明（富山大学） / 伊藤 敬（長崎大学）

【2. 分子・複合体の機能—d. 転写】

近年、遺伝子発現は分子レベルでの機構解明が進んできている。そして、転写制御とクロマチン制御は、遺伝子発現に向けて密接にクロストークしていることが明らかにされてきた。そこで今回、転写制御に関わる転写開始装置とクロマチン制御に関わるヒストン修飾複合体やクロマチンリモデリング複合体を研究している海外トップ研究者や若手を演者に加えて、転写制御とクロマチン制御がいかにクロストークしているかを議論する。

1W16. ゲノム編集による哺乳類遺伝学の革命と生命科学研究の新展開

J

Revolution in Mammalian Genetics and Recent Advances in Life Science by Genome Editing

オーガナイザー：山本 卓（広島大学） / 畑田 出穂（群馬大学）

【6. 方法論・技術—a. 核酸工学・ゲノム編集】

TALEN や CRISPR/Cas を用いたゲノム編集技術の隆盛に伴い、多様な生物種における遺伝学のスタイルは近年急速に変貌を遂げつつある。遺伝子ノックアウトにおいては、とりわけ CRISPR/Cas を用いた迅速かつ簡便な同時多重遺伝子破壊技術のインパクトが大きく、また最近ではゲノム編集から派生した新技術（クロマチンの可視化など）も注目を集めている。本ワークショップでは、哺乳類を中心としたゲノム編集研究を紹介すると共に、ゲノム編集の新技術を用いた生命科学研究の新たなアプローチの可能性について議論する。

1W17. 分子生物学の新技術から捉えた「生老病死」の最前線

J/E

New Technology and Molecular Biology of “Life-Aging-Disease-Death”

オーガナイザー：田中 知明（千葉大学） / 南野 徹（新潟大学）

【5. 高次生命現象・疾患—d. 老化】

ゲノム、トランスクリプトーム、プロテオーム、メタボロームの解析技術やゲノム・遺伝子編集技術の目覚ましい進歩により、ゲノムの配列情報のみならず、細胞内・細胞間・臓器間の多くの情報が捉えられるようになってきた。釈迦の目指した「生老病死」への分子生物学的回帰である。核初期化・細胞老化に代表されるような細胞生命現象の多様性と複雑さのみならず、環境や臓器・個体とのクロストーク、エピゲノム制御や分子シグナルとの結びつきが引き起すがんや糖尿病など多くの病気の原因との結びつきである。例えば、癌抑制遺伝子 p53 はこれらの作用メカニズムを用いて「生（まれ変わり）：核リプログラミング」、「老：細胞老化・個体老化」、「病：がん・生活習慣病」、「死：アポトーシス」を制御する key regulator とも言えよう。本ワークショップでは、「生老病死」をテーマに分子生物学の新技術から捉えた研究を紹介する中で、最先端の知見を議論したい。

1W18. 細胞内共生した生物や環境ウイルスのゲノム進化

J

Evolution of endosymbiont-derived genomes and environmental viruses

オーガナイザー：橋本 哲男（筑波大学） / 武村 政春（東京理科大学）

【1. 分子構造・生命情報—a. ゲノム・遺伝子・核酸】

ミトコンドリアや葉緑体が真核細胞内に取り込まれたバクテリアを起源とすることは広く知られているが、これらのオルガネラ以外にも多様な生物で細胞内共生は見られる。また近年、海洋などを中心に「巨大ウイルス」をはじめとした新たな環境ウイルスが発見されており、こうしたウイルスと生物との相互作用につき、生物進化や生態系の観点から関心が高まっている。本ワークショップでは、細胞内共生した生物の多様性と進化、および宿主と共生者の関係、ならびにウイルスの生態と宿主との関係について、最新の進化ゲノミクス研究を通じて解き明かす。

2W2. 多角的アプローチによるゲノム機能の包括的理解

J/E

Comprehensive understanding of genome functions through integrative approaches

オーガナイザー：井上 聡（東京大学）／藤井 穂高（大阪大学微生物病研究所）

【2. 分子・複合体の機能—d. 転写】

生命現象を司るゲノム機能発現機構の解明には、ゲノム全域でのイベントの俯瞰と特定ゲノム領域での分子複合体形成過程の理解の両面が必要であり、近年、それを可能にするための解析技術が続々と登場している。さらに、検出したイベントの意義付けにも多彩な手法を用いた解析が行われつつある。本ワークショップでは、こうした新しい分子生物学的戦略を用いたゲノム機能発現機構の包括的解析について議論したい。

2W3. ユビキチンをはじめとした翻訳後修飾によるタンパク質の機能・動態変換

J

Dynamics of proteins and organelle regulated by ubiquitin and posttranslational modifications

オーガナイザー：岩井 一宏（京都大学）／村田 茂穂（東京大学）

【3. 細胞の構造と機能—d. タンパク質プロセッシング・輸送・局在化】

ユビキチン化をはじめとしたタンパク質翻訳後修飾（PTM）は、オルガネラ動態、膜タンパク質輸送、タンパク質分解、DNA 修復、シグナル伝達など広範な生命現象の制御を担っていることが明らかとなり、その重要性は今なお拡大する一途である。さらに、新しい解析手法の発達により、例えばユビキチン化のメカニズムそのものに関する全く新しい知見なども得られはじめてきた。本ワークショップでは若手研究者を中心に、この分野の新しい潮流をなすトピックを口演していただく。

2W4. 生体酸素ダイナミクスの感知・応答研究の最先端

J

Leading edge researches of sensing/response mechanisms for oxygen dynamics

オーガナイザー：南学 正臣（東京大学）／田久保 圭誉（国立国際医療研究センター研究所）

【3. 細胞の構造と機能—g. シグナル伝達】

生体内の臓器や細胞ごとの微小環境における酸素分圧はそれぞれ異なる。また、発生時期や病態ではダイナミックに酸素分圧が変動し、酸素分子由来の活性酸素種の産生も認められる。こうした酸素ダイナミクスに対応して恒常性を維持するために生体は各種の感知・応答機構を保有していることが知られつつある。そこで本ワークショップでは酸素センサー分子や、酸素分圧変動への適応・応答分子機構による細胞や臓器、個体レベルの恒常性維持機構の最先端の知見について議論したい。

2W5. システムワイド計測とバイオインフォマティクス

E

System-wide measurement and bioinformatics

オーガナイザー：岩崎 渉（東京大学）／城口 克之（理化学研究所）

【6. 方法論・技術—f. バイオインフォマティクス】

生命システムのより深い理解のためには、新たな計測技術や解析技術を効果的に用いることが必要となる。本ワークショップでは、これらの技術を用いて巧みに生命システムの理解を目指す研究、一細胞や少数細胞からのシステムワイド計測・絶対定量測定を目指す研究、そして、大規模データを活用するための最先端のバイオインフォマティクス研究を取り上げ、次世代の分子生物学研究のスタイルを探る。

2W6. 転移因子とゲノム・エピゲノムダイナミクス

J

Impact of transposable elements on genome and epigenome dynamics

オーガナイザー：一柳 健司（九州大学生体防御医学研究所）／佐瀬 英俊（沖縄科学技術大学院大学）

【1. 分子構造・生命情報—a. ゲノム・遺伝子・核酸】

真核生物ゲノムには転移因子やその残滓が大量に蓄積し、エピゲノムやゲノム動態に大きく関与していることが近年のゲノム解析技術の進歩により詳細に明らかになりつつある。本ワークショップでは様々な生物種において転移因子とそれに対する宿主のエピジェネティックな制御機構がどのように細胞のトランスクリプトームや個体の表現型多様性、種のゲノム進化に影響を与えているのかについて最新の知見を交えて議論する。また、一般演題要旨から関連した研究を数題口頭発表として採択する。

2W7. 幹細胞から様々な機能細胞を分化誘導する試み

J

Induction of various types of functional cells by in vitro culture of stem cells

オーガナイザー：原 孝彦（東京都医学総合研究所）／ 条 昭苑（熊本大学発生医学研究所）

【4. 発生・再生—c. 幹細胞・細胞分化】

ES/iPS 細胞の in vitro 分化誘導実験法が発展したことによって、臓器を構成する様々な種類の細胞を作り出せるようになった。ゲノム編集技術の進歩によって、幹細胞レベルでの遺伝子改変も有効に使われ始めている。このワークショップでは、これまで分化誘導が難しかった臓器の機能細胞を、ES/iPS 細胞や成体幹細胞から作り出そうとする試みに焦点をあてる。モデル生物を用いて、新しい分化誘導原理を見出そうとする研究も歓迎する。

2W8. 遺伝性疾患の分子病態：分子機能から高次生命機能へ

J/E

Molecular Pathology of Genetic Diseases: from Molecules to Higher Biological Functions

オーガナイザー：菅澤 薫（神戸大学）／ 高田 穰（京都大学）

【5. 高次生命現象・疾患—g. 遺伝性疾患】

分子生物学の知識・技術の進歩により、さまざまな遺伝性疾患の責任遺伝子とその分子機能が明らかにされてきた。一方、分子の機能から単純に説明できない複雑な症状・病態を示す疾患も多く、両者をつなぐメカニズムの詳細は未だ解明の途上にある。本ワークショップではさまざまな遺伝性疾患に関わる最新の研究成果を踏まえ、個々の分子機能と高次生命機能の統合的理解に向けた今後の研究の方向性について議論したい。

2W9. 免疫受容体による細胞間コミュニケーションの新しい地平線

J

New horizons for intercellular communication mediated by immune receptors

オーガナイザー：深井 周也（東京大学）／ 前仲 勝実（北海道大学）

【5. 高次生命現象・疾患—b. 免疫】

近年、免疫に関連する膜受容体や分泌タンパク質ファミリーが、神経発生などの免疫とは異なる生命現象でも重要な役割を担う例が報告されるようになってきた。本ワークショップでは、免疫から神経発生における軸索誘導やシナプス形成まで、リガンドー受容体あるいはヘテロな受容体間相互作用による多彩な細胞間コミュニケーションのメカニズムに関する最新の知見を集めて議論したい。

2W10. 動物および植物のスケーリング成長：細胞、器官、個体をつなぐサイズと形態のコントロール

E

Scaling growth linking cell, organ, and whole organism in animals and plants

オーガナイザー：西村 隆史（理化学研究所）／ 上村 匡（京都大学）

【4. 発生・再生—b. 器官・形態形成・再生】

多細胞生物では、個体のサイズの変化に応じて、それぞれの組織や器官のサイズは一定の比例関係を保ちつつ変化する。本ワークショップでは外環境や体のサイズが変化した場合、どのように器官や細胞のサイズや形態に影響を与えるのか、スケーリング現象に関わる最新の研究成果を紹介する。動物でもサイズコントロールの解明が遅れている神経系や、植物の器官形成など、スケーリングに興味を持つ幅広い層の研究者が集い、理解を深め議論を行う場としたい。

2W11. 生態進化発生学（Eco-Evo-Devo）とは言っても

J/E

Eco-Evo-Devo. All three really integrated?

オーガナイザー：入江 直樹（東京大学）／ 荻野 肇（長浜バイオ大学）

【4. 発生・再生—f. その他】

生態進化発生学？ 聞いただけでも生態と進化と発生を並べた「お祭り感」を感じるが本当にこの3つの分野が統合的に理解できるのだろうか？ 統合的理解には確かに遠い。しかし、多様な行動戦略をとる多細胞生物が発生過程を変え、進化していくという現象が non-coding を含む遺伝情報や大量情報解析、形態学や行動学との合流で多角的に解明されつつある。ワークショップでは一般演題からも広く採択し、幅広く議論したい。

2W12. オルガネラストレスが紡ぐ生活習慣病



Organelle stress as a novel pathophysiology in life style diseases.

オーガナイザー：稲城 玲子（東京大学） / 吉田 秀郎（兵庫県立大学）

【3. 細胞の構造と機能—b. 細胞質オルガネラ】

オルガネラストレス（小胞体ストレス、ミトコンドリアストレス、リソソームストレス、ゴルジ体ストレスなど）に関する細胞レベルでの研究成果が、生活習慣病（糖尿病、腎臓病、心血管病など）の病態生理学の領域に新境地を切り開こうとしている。最先端のオルガネラストレス研究を基礎と疾患の両面から討論し、豊かな健康長寿社会の構築に向けてオルガネラストレス研究のトランスレーショナルリサーチへの発展の重要性を提唱する。

2W13. 人工デザインによる分子認識の最前線—Scaffold を中心として—



Front line of artificial protein design for molecular recognition —focusing on protein scaffolds—

オーガナイザー：久保 泰（産業技術総合研究所） / 根本 直人（埼玉大学）

【6. 方法論・技術—b. タンパク質工学】

生命現象は分子間相互作用の上に成り立っており、そこには極めて精緻な分子認識が働いている。すでに抗体の認識機構については様々な観点から議論され抗体医薬に結実しているが、一方では実用化における問題点も顕在化している。本ワークショップでは、特に次世代抗体あるいは低分子化抗体と呼ばれる多様な分子を標的可能とするスキヤフォールドを中心に様々な無機材料等も認識するペプチドアダプターも含め、最新の研究成果を基に「分子認識」を新たな角度から俯瞰し、今後の可能性について議論したい。

2W14. 動植物における生殖戦略とその分子基盤



Molecular basis for sexual strategy in animals and plants

オーガナイザー：北野 潤（国立遺伝学研究所） / 渡辺 正夫（東北大学）

【2. 分子・複合体の機能—c. エピジェネティクス】

動物、植物に限らず、生殖は種内の多様性を生み出す上で重要であり、一方で、雌雄のゲノムに規定されている情報の相互作用の結果、調和、軋轢といったせめぎ合いが生じる。また、この現象の背景にはゲノムインプリンティング、遺伝子多様性などが見え隠れしつつある。本ワークショップでは、自家不和合性、生殖隔離、受精機構などを例として、各分野の最先端研究者を集め、生殖戦略の実態を展望し、議論したい。

2W15. DNA 修復プロセッシングとゲノムダイナミクス



DNA repair and genome dynamics

オーガナイザー：中別府 雄作（九州大学） / 石川 冬木（京都大学）

【2. 分子・複合体の機能—b. 組換え・変異・修復】

生物は日々生じる DNA 損傷を適切に検出し修復する仕組みを発達させ、ゲノムを安定に維持しており、その異常は神経系を含む多彩な組織機能低下をもたらす。さらに、生物は DNA 修復機構を厳密に制御しつつ活用することで、積極的にゲノムを改変し、生殖細胞形成や成熟した抗体遺伝子の産生など、基本的な生物機能を可能にしている。本ワークショップでは、これらの修復プロセッシングの制御と反応機構を特にクロマチンと核内構造に注目しながら議論する。

2W16. がんの代謝の分子メカニズム



Molecular mechanisms of metabolic reprogramming in cancer

オーガナイザー：曾我 朋義（慶應義塾大学） / 佐谷 秀行（慶應義塾大学）

【5. 高次生命現象・疾患—e. がん】

多くのがんは代謝を解糖系にシフトして増殖、転移に必要な ATP や核酸、タンパク質などの生体高分子の前駆体を生産する。がん細胞が示す代謝のリプログラミングに関心が集まっており、がん特異的な代謝を利用した創薬や腫瘍診断技術の開発も精力的に行われている。近年のがんの代謝研究の進展に伴い、がんの代謝制御に重要な役割を果たしている因子が明らかになってきた。本ワークショップでは、最先端のがん研究をされている先生方に最新の知見を紹介して頂き、がんの代謝の本質に迫りたい。

2W17. クロマチンのエピジェネティック制御と創薬

J/E

Epigenetic chromatin regulation and drug discovery

オーガナイザー：胡桃坂 仁志（早稲田大学）／米田 悦啓（医薬基盤研究所）

【2. 分子・複合体の機能—c. エピジェネティクス】

ヒストンバリエント、ヒストンシャペロン、ヌクレオソームリモデラー、ヒストン修飾、DNA メチル化などによる、クロマチンにおけるゲノム DNA のエピジェネティックな制御は、同一のゲノム情報を持つ細胞からの、組織や器官の発生・分化において本質的な役割を果たしている。近年、このようなクロマチンのエピジェネティック制御の破綻が、発がんやがん細胞の悪性化の主要な原因となることが明らかになってきた。本ワークショップでは、クロマチンのエピジェネティック制御機構の解明を目指した最新研究を紹介し、それらに基づく創薬への試みについて議論する。

2W18. 生命の3大ドメインの分子生物学から考察する遺伝情報制御系の原型

J

Prototype of gene-regulatory machineries based on the molecular biology in the three domains of life

オーガナイザー：金井 昭夫（慶應義塾大学）／石野 良純（九州大学）

【1. 分子構造・生命情報—b. タンパク質】

地球上の生物は、バクテリア（真正細菌）、アーキア（古細菌）、真核生物の3ドメインに分類される。その中で、アーキアの遺伝情報維持と発現制御に関わる各因子は同じ原核細胞のバクテリアよりも真核生物のそれに酷似しており、進化的に大変興味深い。本ワークショップでは、アーキアのDNA複製、修復、転写、RNAプロセッシング、翻訳等の分子機構研究の進展を中心に据えながら、バクテリアや原始的な真核生物における該当分子（群）との比較解析も勘案し、遺伝情報制御系のプロトタイプについて考察する。

3W2. マルチサブユニット複合体の構造と機能の解析

J

Analysis of structure and function of multisubunit complex

オーガナイザー：堀越 正美（東京大学）／西村 善文（横浜市立大学）

【1. 分子構造・生命情報—b. タンパク質】

蛋白質は、単量体もしくはマルチサブユニット複合体であり、個々の蛋白質の研究は、変異機能解析や三次構造解析等が主になっている。複合体のサブユニットの解析には、変異による構造変化、活性検定系の確立等、様々な課題が立ちだかっている。複数の複合体に存在する共通サブユニットの機能解析においては、変異を導入しても、細胞内ではどの複合体による機能変化であるのか、検定法さえ見出されていない。分子生物学が誕生して半世紀以上経過し、隆盛を極める現代にあっても、複合体の解析は遅々としていると言ってもよい。本ワークショップでは、この難題に挑む独創的な研究を様々な分野から取り上げたい。

3W3. ノンコーディング RNA による細胞内プロセス制御

E

Regulation of cellular processes by noncoding RNA

オーガナイザー：中川 真一（理化学研究所）／石井 浩二郎（大阪大学）

【2. 分子・複合体の機能—e. RNA・RNP】

真核細胞では、遺伝子発現制御や細胞内構造体の構築、さらには染色体分離などの多様な細胞内プロセスの制御に、短鎖、長鎖のノンコーディング RNA が密接かつ多能的に関わることが近年明らかになってきている。本ワークショップでは、今まさにバールを脱ぎつつあるそれらノンコーディング RNA による多様な生体制御について幅広い視点から最新の研究を紹介し、包括的に議論を行う場を提供したい。

3W4. 生命活動を支える高次複合体の動態と機能

J

Dynamics and functions of higher-order complexes in cells

オーガナイザー：千葉 志信（京都産業大学）／大橋 英治（九州大学）

【2. 分子・複合体の機能—g. その他】

DNA 複製や転写、翻訳、蛋白質輸送などの生命の根幹となる生体内反応の多くは、蛋白質・核酸・脂質などを含む動的な高次複合体によって支えられている。このような高次複合体の動的な制御機構やその反応の分子機構は、従来の遺伝学や生化学の進歩に加え、イメージング、オミクスなどの技術革新を背景に、急速に明らかになりつつある。本ワークショップでは、そのような複合体の動態と機能について様々な角度から明らかにしようとする研究を紹介し、議論したい。

3W5. ゲノム DNA 複製制御のメカニズム：生物種を超えた統一像と多様性

J/E

Conserved mechanisms and diversity of genome DNA replication: from bacteria to human

オーガナイザー：正井 久雄（東京都医学総合研究所）／升方 久夫（大阪大学）

【2. 分子・複合体の機能—a. DNA 複製】

DNA 複製は細胞・生物の増殖・成長の根幹をなす。原核細胞ゲノム複製はイニシエーターが単一のレプリケーターを特異的に認識し極めて効率よく複製を開始するが、ヒトゲノムには数万個のレプリケーターが存在する。最近の網羅的解析から高等動物の複製起点の場所と構造、核内染色体ドメインの配置とゲノム複製の順番や場所の決定の関連が明らかになりつつある。又、転写やエピゲノム情報も複製制御と密接に関連する。本ワークショップでは、種々の生物種で急速な勢いで蓄積しつつあるゲノム複製制御に関する知見を俯瞰し、その多様性を学ぶと共に、複製開始の保存されたメカニズムを議論したい。

3W6. 分子生物学の発展に貢献する次世代バイオイメージング技術の最前線

J/E

Novel bio-imaging technologies for molecular biology

オーガナイザー：大嶋 佑介（愛媛大学）／片桐 崇史（東北大学）

【6. 方法論・技術—g. その他】

蛍光イメージングに代表されるように、分子生物学の研究ツールとして今や必要不可欠となった「バイオイメージング」の技術は、レーザー光源や光検出器、光デバイスの発展に伴い、日進月歩している。特に、近年では分子を標識せずに可視化することができるラマンイメージングや、光の回折限界を超えた分解能を実現する超解像イメージングなどが注目されており、これらの最先端技術について、最新の研究動向と実用化の将来展望について議論する。

3W7. がん幹細胞のダイナミクス

J/E

Dynamics of cancer stem cells

オーガナイザー：後藤 典子（金沢大学）／北林 一生（国立がん研究センター）

【5. 高次生命現象・疾患—e. がん】

ここ数年で、白血病などの血液のがんや、脳腫瘍や乳がんを始めとする固形がんにもがん幹細胞が存在することが、広く受け入れつつある。さらに、がん幹細胞自体が七変化しており、がん幹細胞が分化したがん細胞に変化したり、分化したがん細胞ががん幹細胞に変化したりという可塑性があることがわかってきた。そこにはがん幹細胞特有の代謝動態も関与しているらしい。本ワークショップでは、最先端のがん幹細胞にまつわる話題を提供していただく。

3W8. 個体で観るエピジェネティクスの最前線

J/E

Cutting edge of developmental epigenetics

オーガナイザー：近藤 隆（神奈川科学技術アカデミー）／磯野 協一（理化学研究所 IMS-RCAI）

【2. 分子・複合体の機能—c. エピジェネティクス】

近年、核内における染色体立体構造というミクロな構造の変化が、転写あるいは複製を介してマクロな生体の機能・構造に大きな影響を持つことが判明しつつある。本ワークショップでは、発生・形態形成の原理・機構に付随する空間的および時間軸に沿った核内における染色体あるいはタンパク質の高次構造変化と遺伝子発現制御に関する研究や技術を中心に、最新の知見を取り上げ、生体エピジェネティクス科学の今後の展開と可能性を考える場としたい。

3W9. 植物細胞に眠るフロンティア：オルガネラ研究のすすめ

J

Opportunities at the Frontier: Organelles Studies in Plants

オーガナイザー：植村 知博（東京大学） / 濱田 隆宏（東京大学）

【3. 細胞の構造と機能—b. 細胞質オルガネラ】

植物は動物と並ぶ古くからの研究対象である。植物では遺伝学に支えられた個体レベルでの解析が盛んに行われているが、その一方、オルガネラ・細胞レベルの研究は十分とは言えない。本ワークショップでは、植物をオルガネラ・細胞レベルで解析することで発見された新たな現象・開拓されうる分野などを紹介する。植物には未知の現象が溢れている！ 未開拓分野がゴロゴロ転がっている。未来の植物研究を支える開拓者、求む！！

3W10. 細胞周期を通じた染色体恒常性制御機構のニューフロンティア

J/E

New frontiers in cell cycle regulation for the maintenance of chromosome homeostasis

オーガナイザー：田中 耕三（東北大学） / 藤田 雅俊（九州大学大学院薬学研究院）

【3. 細胞の構造と機能—f. 細胞増殖・分裂・周期】

染色体恒常性（染色体が質的・量的に維持されること）は生命の根幹に関わる事象であり、その破綻はがんなどの疾患の発生に関与している。これまでその機構はDNAレベルや染色体レベル、S期やM期といった異なるレベル・時期で個別に理解されてきたが、最近の研究成果はこれらを統合的にとらえる必要性を示している。本ワークショップでは、S期とM期の関係やエピゲノム、代謝・栄養状態といった様々な観点から染色体恒常性制御機構について議論する。

3W11. 組織恒常性を維持する適者生存 —細胞の競合と協調—

J

‘Survival of the fittest’ in tissue homeostasis: cell competition and cooperation

オーガナイザー：倉永 英里奈（理化学研究所） / 井垣 達吏（京都大学）

【3. 細胞の構造と機能—i. その他】

細胞社会において環境適応度の異なる細胞が共存すると、それらの細胞間の境界で生じる相互作用によって適応度のより高い細胞が「勝者」、より低い細胞が「敗者」となる。勝者が生存して敗者が排除されることで、組織恒常性が維持されると考えられる。このような競合現象は様々な実験系で観察されるが、その分子実態は未解明な点が多く、その生理的意義や制御機構の解明に注目が集まっている。本ワークショップでは、様々な組織において観察される多彩な細胞競合現象について、その生理的意義と普遍的分子基盤について議論する。

3W12. 脊椎動物の性分化分子機構

J

Molecular mechanisms of vertebrate sex determination

オーガナイザー：黒岩 麻里（北海道大学） / 高田 修治（国立成育医療研究センター研究所）

【4. 発生・再生—d. 生殖】

生殖腺は精巣にも卵巣にも分化できる能力を持った組織であり、様々な要因によりどちらに分化するのかが決まる。脊椎動物におけるこの性決定の要因は多様で、遺伝子、孵卵温度、個体をとりまく社会性など多岐にわたる。一方で、性が決まった後の生殖腺の精巣や卵巣への分化・発生は、脊椎動物で共通の過程も存在している。脊椎動物の性決定、性分化の分子機構およびその多様性、保存性について議論する。

3W13. Notch シグナル～その多様性と普遍性～

J/E

Diversity and universality in Notch signaling

オーガナイザー：松野 健治（大阪大学） / 北川 元生（千葉大学）

【4. 発生・再生—b. 器官・形態形成・再生】

Notch 受容体を介するシグナル伝達系（Notch シグナル伝達系）は、進化的に保存されており、発生や恒常性の維持に重要な役割をはたしている。Notch シグナルの特徴は細胞間の直接の接触によって起動することであるが、最近この接触が一見離れて存在する細胞間でフィロポディアを介して生じる場合があることわかってきた。また細胞内シグナルに関しても、非古典経路の実態が明らかとなりつつある。本ワークショップでは Notch シグナルに加えて Wnt、Hedgehog、TGF- β 、Hippo 等の発生に関わるシグナル系の研究の新たな方向性を討論する。Notch 以外の他の発生に関わるシグナルについての一般演題からの応募も歓迎する。

3W14. 多様な DNA 損傷応答の統合制御機構



Comprehensive regulatory system in DNA damage response

オーガナイザー：中田 慎一郎（大阪大学）／柴田 淳史（群馬大学）

【2. 分子・複合体の機能—b. 組換え・変異・修復】

DNA 損傷はがんや老化の原因となる危険な細胞刺激である。DNA 修復、細胞周期チェックポイント、シグナル、細胞死誘導など DNA 損傷により惹起される細胞応答の分子機構が明らかになってきている。これらの反応は相互に関連して制御されているはずだが、その機構はまだ詳しくわかっていない。本ワークショップでは次世代研究テーマである DNA 損傷から細胞運命決定までの連動について、各分野が融合する議論の場を設けたい。

3W15. クロマチン・染色体・細胞核のダイナミクス



Dynamics of chromatin, chromosome, and nucleus

オーガナイザー：菊池 裕（広島大学）／佐渡 敬（近畿大学）

【3. 細胞の構造と機能—a. 染色体・核内構造体】

発生・分化・脱分化や外部環境変化に応じて起こる遺伝子発現変化に伴い、クロマチン・染色体・細胞核はダイナミックに構造変化する。本ワークショップでは、様々なモデル系を用いて、染色体やクロマチンドメインレベルでのインプリンティング、モノアレル発現、エピゲノム変化などの分子機構に迫る研究を紹介する。特に、生物個体レベルでの計測と機能制御を通じた染色体構造・細胞核構造にも焦点を当て、生命現象における染色体活性制御についての統合的な理解を深めたい。

3W16. 代謝恒常性の変容と生活習慣病



Cellular to organ-level dysregulation of metabolic homeostasis in non-communicable diseases

オーガナイザー：尾池 雄一（熊本大学）／真鍋 一郎（東京大学）

【5. 高次生命現象・疾患—f. 代謝】

生活習慣病では細胞から全身のレベルまで代謝恒常性の変容がみられるとともに、様々な組織に慢性炎症が生じる。さらに、代謝系と免疫系の間に密接な連携があることも分かってきている。本ワークショップでは、様々な細胞の細胞内代謝を含む代謝恒常性の維持機構と変容、それによる炎症の開始と慢性化、さらに病態発症の分子機序を検討したい。最新のデータをもとに、生活習慣病における代謝と炎症制御の新たな理解を深めたい。

3W18. 「食」と「カラダ」の相互作用：メタゲノミクスからニュートリゲノミクスまで



Mutual interaction between food and the body : from metagenomics to nutrigenomics

オーガナイザー：山田 拓司（東京工業大学）／矢作 直也（筑波大学）

【6. 方法論・技術—e. 病因解析・診断】

ヒトの腸内は細菌群集や栄養環境として複雑な環境システムを形成している。近年の解析技術により、腸内環境システムの解析は飛躍的な進歩を見せている。細菌群集構造はメタゲノミクスの登場により網羅的な解析が行われ、腸内における栄養環境が遺伝子発現に与える影響はニュートリゲノミクスの発展により臓器や個体レベルで明らかになるまでに到達している。

本ワークショップでは、エピゲノム修飾や翻訳制御も含めて、栄養環境が遺伝子発現に及ぼす影響、腸内細菌叢やそれらが生み出す新たな代謝物との相互作用、さらには疾患の原因としての腸内環境も視野に入れながら議論を行いたい。

Contributors for organizing this session：奥田 修二郎（新潟大学）

松本 道宏（国立国際医療研究センター研究所）

第 37 回日本分子生物学会年会 宿泊申込のご案内

この度、「第 37 回日本分子生物学会年会」開催にあたり、ご参加される皆様方の便宜をおはかりするため、(株)日本旅行 西日本 MICE 営業部にて宿泊の手配をお手伝いさせて頂くこととなりました。厚く御礼申し上げます。

つきましては、下記ご参照の上、お申込頂きますようお願い申し上げます。

お申込みの際は空室状況の確認、及びお支払手続きがスムーズなため、年会ホームページにリンクされております**宿泊受付ホームページからの予約をおすすめします。**

是非ご利用ください。(宿泊受付ホームページアドレス <https://v3.apollon.nta.co.jp/mbsj2014/>)

1、宿泊期間 : 平成26年11月24日(月)チェックイン～11月28日(金)チェックアウトの4泊

2、宿泊料金 : 1泊朝食付税金サービス料込のお一人様料金です。

【宿泊ホテルリスト】 ※宿泊受付ホームページにて空室状況閲覧可能

ホテル名		宿泊料金(1泊朝食税サ込)						エリア	最寄駅からのアクセス
		シングル		ツイン(2名利用)		ツイン又はダブル(1名利用)			
		申込記号	料金	申込記号	料金	申込記号	料金		
ヨコハマグランド インターコンチネンタルホテル	全日	—	—	1-T	¥12,000	1-TS	¥21,000	みなと みらい	みなとみらい駅徒歩1分 JR桜木町駅徒歩10分
横浜ベイホテル東急	全日	—	—	2-T	¥11,500	2-TS	¥21,000	みなと みらい	みなとみらい駅徒歩1分 JR桜木町駅徒歩11分
横浜ロイヤルパークホテル	全日	—	—	3-T	¥13,000	3-TS	¥22,000	みなと みらい	みなとみらい駅徒歩1分 JR桜木町駅徒歩5分
ニューオータニイン横浜	全日	—	—	4-T	¥11,880	4-TS	¥17,820	桜木町	JR桜木町駅徒歩1分
横浜桜木町ワシントンホテル	全日	5-S	¥11,500	5-T	¥9,000	—	—	桜木町	JR桜木町駅徒歩1分
横浜マングリンホテル	全日	6-S	¥8,640	6-T	¥8,100	—	—	桜木町	JR桜木町駅徒歩6分 京急日の出町駅徒歩3分
ブリーズベイホテル・ リゾート&スパ	全日	7-S	¥10,800	7-T	¥7,560	—	—	桜木町	JR桜木町駅徒歩2分
横浜平和プラザホテル	全日	8-S	¥7,300	8-T	¥5,500	—	—	馬車道	みなとみらい線馬車道駅徒歩1分
ホテルルートイン横浜馬車道	全日	9-S	¥6,480	9-T	¥4,860	—	—	馬車道	みなとみらい線馬車道駅徒歩2分
ホテルニューグランド	全日	—	—	10-T	¥10,260	10-TS	¥17,280	中華街	みなとみらい線元町・中華街駅徒歩1分
ローズホテル横浜	全日	—	—	11-T	¥9,720	11-TS	¥15,120	中華街	みなとみらい線元町・中華街駅徒歩1分
スターホテル横浜	全日	12-S	¥9,180	12-T	¥7,560	—	—	中華街	みなとみらい線元町・中華街駅徒歩2分
ホテルJALシティ関内 横浜	全日	13-S	¥9,180	13-T	¥8,100	—	—	関内	みなとみらい線日本大通り駅徒歩3分
ホテルウイング インターナショナル横浜関内	全日	14-S	¥8,100	14-T	¥7,020	—	—	関内	JR関内駅徒歩1分
横浜伊勢佐木町 ワシントンホテル	全日	15-S	¥9,180	15-T	¥7,020	—	—	関内	地下鉄伊勢佐木長者駅徒歩1分 JR関内駅徒歩5分
横浜ベイシェラトンホテル &タワーズ	全日	16-S	¥18,360	16-T	¥11,880	—	—	横浜駅	JR横浜駅徒歩1分
ホテルキャメロットジャパン	全日	17-S	¥9,720	17-T	¥7,560	—	—	横浜駅	JR横浜駅徒歩5分
ホテルプラム/コスモ Y.	全日	18-S	¥8,640	18-T	¥6,480	—	—	横浜駅	JR横浜駅徒歩7分

- 3、お申込方法(FAX用)：(1)別紙「宿泊申込書」に必要事項をご記入の上、FAXして下さい。
 (2)受付完了後、弊社より予約確認書兼請求書を1週間以内にFAX送信いたします。
 (3)予約内容を必ずご確認下さい。訂正・変更・取消が生じた場合は、ご面倒ですがFAX又はEメールにてご連絡下さい。
 (4)請求書及び宿泊クーポンは郵送されません。何卒ご了承下さい。

- 4、お支払い方法：[クレジットカード決済]⇒「宿泊申込書」にカード情報をご記入の上、FAXして下さい。

[銀行振込]⇒11月10日(月)までに、請求書(FAX)記載の銀行口座までお振込み下さい。

- 5、申込み締切日：平成26年11月10日(月)

- 6、宿泊取消料：取消料金は、下記表の料金が必要となります。宿泊日、人員の変更の場合にも下記取消料金がかけられますのでご了承下さい。(旅行条件詳細につきましては宿泊受付ホームページで必ずご確認ください)

(1) ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル

取消日	取消料
宿泊開始の10日前まで	無料
宿泊開始の9日前から前々日まで	(旅行代金の)20%
宿泊開始の前日	(旅行代金の)50%
宿泊当日	(旅行代金の)100%
無連絡の取消及び不泊	(旅行代金の)100%

(2) その他のホテル

取消日	取消料
宿泊開始の8日前まで	無料
宿泊開始の7日前から4日前まで	(旅行代金の)10%
宿泊開始の3日前から前々日まで	(旅行代金の)20%
宿泊開始の前日	(旅行代金の)40%
宿泊当日	(旅行代金の)50%
無連絡の取消及び不泊	(旅行代金の)100%

7、お申込み・お問い合わせ先

(株)日本旅行 西日本MICE営業部
 「第37回日本分子生物学会年会」受付デスク
 〒530-0001 大阪市北区梅田1-11-4 大阪駅前第4ビル5F
 TEL:06-6342-0230/FAX:06-6342-0232 E-mail: wj_gakkai@nta.co.jp
 (営業時間 平日…9:45~17:45 休業日…土日祝日)

《 宿泊申込書 》

FAX 06-6342-0232

申込日 月 日

フリガナ お 申 込 者 名		メールアドレス (携帯不可)	ご記入の場合メールアドレスで登録いたします。
ご 連 絡 先 住 所 □自宅 □勤務先	〒	電 話	
		F A X	
所 属 先 名		携帯電話	

[illegible]

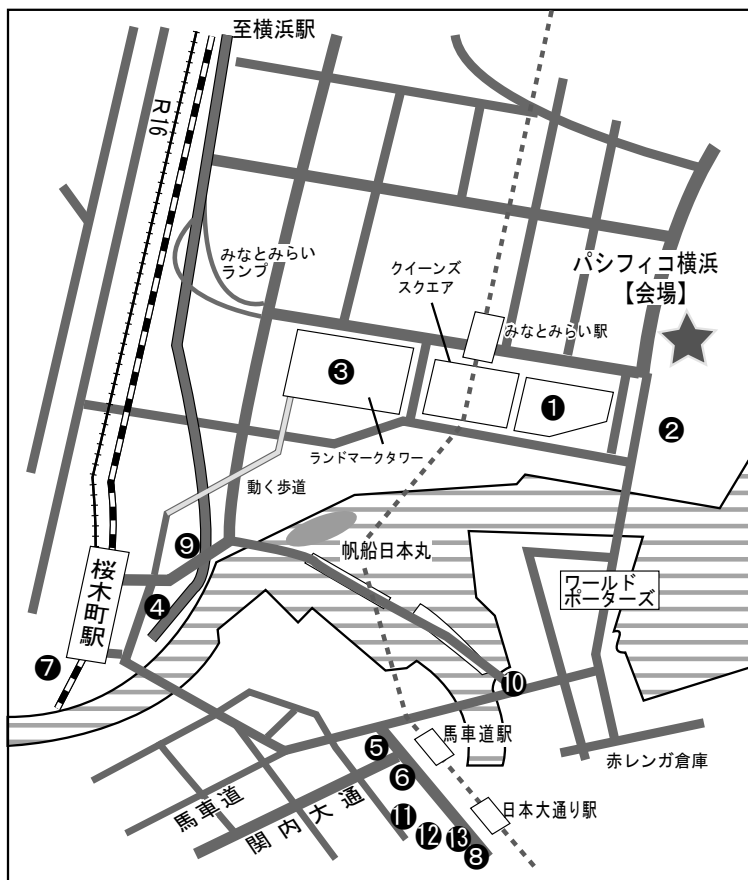
* ツイン（2名1室）ご利用の方のみ同室者名をご記入ください。

☐ クレジットカード決済・・・必要事項を下記へ正確にご記入ください。

カード種類	☐ VISA ☐ JCB ☐ DC ☐ UFJ ☐ UC (※) ☐ AMEX ☐ NICOS ☐ ダイナース ☐ MASTER ※MASTERの国際カードは日本国内ではUCカードによる決済となります												
カード番号													
有効期限	20 年 (YEAR) 月 (MONTH)					ご 署 名							

【第37回日本分子生物学会 ホテルのご案内】

みなとみらい地区



- ① 横浜ベイホテル東急
- ② ヨコハマグランド
インターコンチネンタルホテル
- ③ 横浜ロイヤルパークホテル
- ④ 横浜桜木町ワシントンホテル
- ⑤ 横浜平和プラザホテル
- ⑥ ホテルルートイン横浜馬車道
- ⑦ フリーズベイホテル・リゾート&スパ
- ⑧ スターホテル横浜
- ⑨ ニューオータニイン横浜
- ⑩ ナビオス横浜
- ⑪ ホテルJALシティ関内
- ⑫ ローズホテル横浜
- ⑬ ホテルニューグランド
- ⑭ ホテルキャメロットジャパン
- ⑮ 横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ
- ⑯ ホテルプラム
- ⑰ 横浜マンダリンホテル
- ⑱ ホテルウィングインターナショナル
- ⑲ 横浜伊勢佐木町ワシントンホテル

※ホテルの位置は目安です

関内駅周辺



横浜駅周辺



学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 一條 秀憲
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4 階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 月田早智子
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4 階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

- 委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり1件となっておりますので、ご了解ください。
- 重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いいたします。

研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第45回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒100-0005 千代田区丸の内 2-3-1	総額 2億5,000万円	2014年 2月4日	1件当たり 2,000万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
山田科学振興財団 2014 年度研究援助	(公財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒 544-8666 大阪市生野区巽西 1-8-1	15 件程度 (本学会の 推薦枠は 5 件)	2014 年 2 月 28 日	1 件当たり 100 ～ 500 万円、 総額 3,000 万円	自然科学の基礎的研究に対して の研究費援助。 [推薦書は山田財団HPより] ダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/]
山田科学振興財団 国際学術集会開催助成 (2017 年開催)		総額 800 万円以内	2014 年 4 月 1 日～ 2015 年 2 月 27 日 (募集期間)	総額 800 万円以内	以下の要件を満たす学術集会を 山田コンファレンスもしくは山 田シンポジウムと称し、これら の開催を援助する。 ①基礎科学の適切なテーマにつ いて、国際的視野で最高レベ ルの研究を総括する。 ②研究者の世代間の対話によっ て、若い世代の研究の発展の 基礎を構築する。 ③異分野間の交流を図り、cross- disciplinary な討論を通じて新 しい発展を模索する。 詳細 山田財産 HP 参照。
第 30 回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1724 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1 日本学術振興会内	1 件 (1 件)	2014 年 5 月 16 日	賞状、賞牌、 1,000 万円	生物学の研究において世界的に 優れた業績を挙げ、世界の学術 進歩に大きな貢献をした研究者。 第 30 回の授賞分野は「系統・分 類を中心とする生物学」。
第 31 回持田記念学術賞	(公財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒 160-0003 新宿区本塩町 7-6 四谷ワイズビル	2 件以内 (1 件)	2014 年 7 月 31 日	1 件 1,000 万円	学術賞は次の 6 項目の研究分野 で、研究の進歩発展のため顕著 な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端 医療に関する研究 (2)バイオ技術を基盤とするゲノム 機能 / 病態解析に関する研究 (3)免疫 / アレルギー / 炎症の治 療ならびに制御に関する研究 (4)循環器 / 血液疾患の病態解析 / 治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬の臨床応用に関する研究
第 32 回研究助成		総額 2 億 7,000 万円	2014 年 6 月 20 日	1 件 300 万円	
第 31 回国内および 海外留学補助金		総額 1,000 万円	2014 年 6 月 20 日	1 件 50 万円	
平成 27 年度笹川科学 研究助成	(公財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒 107-0052 港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル	生物系で約 90 件 (25 年度実績)	募集期間 2014 年 * 10 月 1 日～ 10 月 15 日	1 件当たり 100 万 円まで	人文・社会科学および自然科学 (医学を除く) の研究計画に関す るもの。4 月 1 日現在、35 歳以 下の若手研究者へ助成。
上 原 賞	(公財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2 件以内 (1 件)	2014 年 * 9 月 5 日	金牌、 2,000 万円	生命科学の東洋医学、体力医学、 社会医学、栄養学、薬学一般お よび基礎医学、臨床医学で顕著 な業績を挙げ、引き続き活躍中 の研究者。
第 31 回井上學術賞	(公財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601	5 件以内 (2 件)	2014 年 9 月 20 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕 著な業績を挙げた者(ただし締 切日現在満 50 歳未満)。
第 31 回井上研究奨励賞		40 件	2014 年 9 月 20 日	賞状及び銅メダル、 50 万円	過去 3 年間に、理学・工学・医学・ 薬学・農学等の自然科学の基礎 的研究において、新しい領域を 開拓する可能性のある優れた博 士論文を提出し博士の学位を取 得した研究者で、37 歳未満の者
第 7 回井上リサーチ アワード		4 名以内 (うち 1 名以上 女性研究者)	2014 年 7 月 31 日	1 人当たり 500 万円 (研究期間は 2 年)	開拓的發展を目指す若手研究者 の独創性と自立を支援する目的 で、研究を助成。期間は 2 年。
第 23 回木原記念財団 学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学振 興財団 ☎ (045) 502-4810 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6	1 件 (1 件)	2014 年 9 月 30 日	賞状、 200 万円	最近において生命科学の分野で 優れた独創的研究を行っている 国内の研究者で、原則として締 切日現在 50 歳以下の者。
住友財団 2014 年度 基礎科学研究助成	(公財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2 号館	総額 1 億 6,000 万円 90 件程度	2014 年 6 月 30 日	1 件当たり 500 万 円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にま たがる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者(個人また はグループ)を対象とする。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 55 回藤原賞	(公財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12	2 件 (1 件)	2014 年 1 月 31 日	副賞 1,000 万円	推薦の対象は自然科学分野に属するもの。わが国に国籍を有し、科学技術の発展に卓越した貢献をした者。
平成 27 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞および若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2	科学技術賞 140 件(年)のうち、研究部門は 40 件程度 若手科学者賞は 100 名程度 (学会推薦枠は定まっていないが推薦は若干名まで)	2014 年 * 7 月 16 日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究又は発明を行った個人又はグループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を挙げた 40 歳未満の若手研究個人。
平成 26 年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1	1 件 (推薦枠は若干件)	2014 年 9 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 500 万円	科学技術、主として科学計測およびその周辺の領域における基礎的な研究において、近年著しい成果をあげた功労者を対象とする。
島津科学技術振興財団研究開発助成		総額 1,200 万円	2014 年 9 月 30 日	1 件当たり 100 万円以下	上記同様を研究対象とする、国内の研究機関に所属する 45 歳以下の新進気鋭の日本人研究者。
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 ☎ (047) 350-6103 〒 279-8555 浦安市美浜 1-8-1 東レビル	2 件前後 (2 件)	2014 年 * 10 月 10 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、重要な発明により効果が大い者、技術上の重要問題を解決し貢献が大い者。
東レ科学技術研究助成		総額 1 億 3,000 万円 10 件程度 (2 件)	2014 年 * 10 月 10 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の進歩・発展に貢献するところが大きいと考えられる、独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者（原則として 45 歳以下）。
ノバルティス研究奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 5464-1460 〒 106-0031 港区西麻布 4-16-13 西麻布 28 森ビル 10F	約 35 件 指定機関からの推薦必要	2014 年 * 9 月 16 日	1 件 100 万円	生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域における創造的な研究に対して助成。
第 46 回内藤記念科学振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3861 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8 階	1 件 (1 件)	2014 年 10 月 1 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第 46 回海外学者招へい助成金		前期・後期各 10 件以内	2014 年 6 月 2 日・ 10 月 1 日	1 件 20 ～ 80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者（当該学術集会の組織委員長）に贈呈。
ブレインサイエンス財団研究助成	(公財)ブレインサイエンス振興財団 ☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	15 件以内	2014 年 * 10 月 10 日	1 件 120 万円	脳科学の広い分野における独創的な研究計画への助成。
塚原伸見記念賞		1 件		賞牌ならびに 副賞 150 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている 50 歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2015 年 * 1 月 9 日	1 件 30 万円まで	我が国における脳科学の研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	脳科学研究分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間の招聘を助成。
平成 27 年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	10 数件	2014 年 * 11 月 28 日	1 件 250 万円以内	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 11 回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 研究者養成課 「日本学術振興会賞」担当 ☎ (03) 3263-0912 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1	25 件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あ り)	2014 年 4 月 14 日～ 4 月 16 日 (受付日)	賞状、賞碑、 研究奨励金 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者 (45 歳未満)。
第 5 回日本学術振興会育志賞		16 件程度 (1 件)	2014 年 6 月 11 日～ 6 月 13 日 (受付日)	賞状、賞碑、 学業奨励金 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰 (34 歳未満)。
(一財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1 件	2014 年 4 月 30 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 26 年度研究助成	(公財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	総額 5,000 万円	2014 年 7 月 22 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2014 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近 は 4～5 件 (1 件)	2014 年* 8 月 31 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 26 回加藤記念研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 ☎ (042) 725-2576 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6	25 件 総額 5,000 万円	2014 年* 9 月 30 日	1 件 200 万円	バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援する。年齢制限あり。
平成 27 年度(第 4 回)三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 ☎ (03) 3780-2317 〒 150-0021 渋谷区恵比寿西 2-20-3 代官山 CA ビル	自然科学部門 で 2 件以内 (2 件)	2014 年 9 月 30 日	1 件 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。
平成 26 年度(第 52 回)三島海雲学術研究奨励金		全部門計 45 件程度	2014 年 1 月 10 日 ～2 月 28 日	自然科学部門は 1 件 100 万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
一般研究助成	(公財)発酵研究所 ☎ (06) 6300-6555 〒 532-8686 大阪市淀川区十三本町 2-17-85	研究課題ごと に 10 件	2014 年* 8 月 20 日	1 件 300 万円	日本の研究機関に所属し、微生物(細菌、アーキア、菌類、微細藻類)に関する研究を行っている研究者。
大型研究助成		合計 4 件	2014 年* 8 月 20 日	1 件 1,000 万円	研究課題 (1)微生物の分類、生態、進化に関する研究 (2)発酵、応用微生物に関する研究 (3)健康、環境に関与する微生物の研究
若手研究者助成		1 件	2014 年* 8 月 20 日	年間 500 万円 助成期間 3 年間	日本の研究機関に所属し、微生物(細菌、アーキア、菌類、微細藻類)に関する研究を行う 40 歳以下のポスドク。
寄付講座助成		1 件	2014 年* 9 月 19 日	2 億 5 千万円 設置期間 5 年間	微生物の研究を行う寄付講座の設置を希望する日本の国立大学、公立大学および私立大学のいずれかに属する部局(研究科、学部または研究所)を対象に、独創性があり、新しい発見を目指した研究に助成。

●件数の()内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年の締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○第19回日本病態プロテアーゼ学会学術集会

会 期：平成26年8月8日(金)～9日(土)

会 場：千里ライフサイエンスセンター
(大阪府豊中市)

学術集会長：田中啓二

(公益財団法人 東京都医学総合研究所)

開 催 案 内：<http://jspp.kenkyuukai.jp/event/>

学会参加費：会員5,000円 非会員8,000円 学生無料

連 絡 先：〒634-8522 橿原市四条町840

奈良県立医科大学産婦人科学教室内

TEL：0744-29-8877 FAX：0744-23-6557

E-mail：cpipt@naramed-u.ac.jp

8月8日(金) 12：00～（予定）講演会

◆教育講演「異物排出輸送の構造的基盤」

山口明人（大阪大学産業科学研究所 生体防御学研究
室 特任教授・同大名誉教授）

◆勝沼信彦先生追悼講演「勝沼信彦先生と共に歩んだ プロテアーゼの病態代謝研究（インフルエンザ感染の重 症化とその予防と治療）」

座長：木南英紀（順天堂大学 学長）

木戸 博（徳島大学疾患酵素学研究センター 特任教授）

◆ワークショップ『オートファジー研究の最前線』

オーガナイザー 吉森 保・水島 昇

○「オートファジーの代謝生理学的役割」

水島 昇（東京大学大学院医学系研究科 分子生物
学分野 教授）

○「オートファジーが司る転写因子群による代謝制御 機構」

小松雅明（新潟大学大学院医歯学総合研究科 教授）

○「自然免疫応答の制御におけるオートファジーの役割」

齊藤達哉（大阪大学微生物病研究所 自然免疫学
准教授）

○「オートファジーと疾患」

吉森 保（大阪大学大学院医学系研究科 生命機能
研究科 教授）

◆一般ポスター講演

8月9日(土) 9：00～（予定）講演会

◆特別講演「酵母のオートファジー研究から見えて来た 今後の課題」

大隅良典（東京工業大学フロンティア研究機構 特任
教授）

◆シンポジウム

『ユビキチンとプロテアソーム研究の最前線』

オーガナイザー 岩井一宏・村田茂穂

○「非定型ユビキチン鎖によるシグナル伝達制御機構」

岩井一宏（京都大学大学院医学研究科 細胞機能制
御学 教授）

○「BRCA1のDNA損傷応答とヒストン修飾」

太田智彦（聖マリアンナ医科大学大学院医学研究科
応用分子腫瘍学 教授）

○「ミトコンドリア品質管理に関わるPINK1と Parkinの分子機構」

尾勝 圭（公益財団法人東京都医学総合研究所 蛋
白質リサイクルプロジェクト 研究員）

○「ユビキチン化タンパク質のプロテアソームによる 認識機構と細胞内動態」

村田茂穂（東京大学大学院薬学系研究科 蛋白質代
謝学教室 教授）

○「プロテアソームの細胞内動態」

佐伯 泰（公益財団法人東京都医学総合研究所
蛋白質代謝研究室 副参事研究員）

○「ユビキチン - プロテアソームシステムに対する 阻害剤の開発」

塚本佐知子（熊本大学大学院生命科学研究部（薬学
系） 教授）、横沢英良（愛知学院大学薬学部 教授）

第18期役員・幹事・各委員会名簿

理事長

(任期：2013年1月1日～2014年12月31日)

大隅 典子 (東北大・医)

副理事長

小原 雄治 (遺伝研)

中山 敬一 (九大・生医研)

理事

阿形 清和 (京大・理)

五十嵐和彦 (東北大・医)

一條 秀憲 (東大・薬)

上村 匡 (京大・生命)

岡田 清孝 (自然科学研究機構)

近藤 滋 (阪大・生命機能)

佐々木裕之 (九大・生医研)

篠原 彰 (阪大・蛋白研)

田中 啓二 (都医学研)

長田 重一 (京大・医)

花岡 文雄 (学習院大・理)

三浦 正幸 (東大・薬)

山本 雅之 (東北大・医)

荒木 弘之 (遺伝研)

石川 冬木 (京大・生命)

上田 泰己 (東大・医)

大隅 良典 (東工大・フロンティア研究機構)

後藤由季子 (東大・薬)

相賀裕美子 (遺伝研)

塩見美喜子 (東大・理)

高橋 淑子 (京大・理)

月田早智子 (阪大・生命機能)

西田 栄介 (京大・生命)

町田 泰則 (名大・理)

山本 正幸 (基生研)

渡邊 嘉典 (東大・分生研)

監事 郷 通子 (情報・システム研究機構)、永田 恭介 (筑波大)

幹事

庶務幹事 石野 史敏 (医科歯科大・難治研)、本間美和子 (福島県立医大・医)

会計幹事 後藤由季子 (東大・薬)

編集幹事 上村 匡 (京大・生命)

広報幹事 荒木 弘之 (遺伝研)、金井 正美 (医科歯科大・実験動物センター)

集会幹事 武田 洋幸 (東大・理 / 第36回年会)、塩見美喜子 (東大・理 / 第37回年会)

第18期執行部

大隅理事長、石野庶務幹事、本間庶務幹事、
荒木広報幹事、金井広報幹事、小原副理事長 (オブザーバ)

Genes to Cells 編集長

柳田充弘 (沖縄科学技術大学院大学)

賞推薦委員会

一條秀憲 (委員長)、五十嵐和彦、相賀裕美子、長田重一、花岡文雄

研究助成選考委員会

月田早智子 (委員長)、大隅良典、佐々木裕之、高橋淑子、町田泰則

国際会議支援・選考委員会

西田栄介 (委員長)、上田泰己、岡田清孝、田中啓二、三浦正幸

キャリアパス委員会

塩見美喜子 (委員長)、石井 優、井関祥子、岩崎 渉、小野弥子、五島剛太
小林武彦、斎藤通紀、佐藤 健、白髭克彦、東山哲也、柳田素子

研究倫理委員会

小原雄治 (委員長)、岡田清孝、塩見美喜子、篠原 彰、町田泰則

生命科学教育

篠原 彰 (担当理事)

生命倫理懇談会

〈検討中〉

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」基金運営委員会 (任期：2010年10月1日～2014年12月31日)

山本正幸 (委員長)、阿形清和、岡田清孝、近藤 滋、塩見美喜子、嶋本伸雄
谷口維紹、大隅典子 (職指定委員)

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2014 年 6 月現在)

アサヒグループホールディングス株式会社 イノベーション研究所
株式会社エー・イー企画
科学技術振興機構 バイオサイエンスデータベースセンター
科研製薬株式会社 創薬研究部
協和発酵キリン株式会社 研究本部研究推進部
コスモ・バイオ株式会社 開発部
株式会社サン・フレア
第一三共株式会社 バイオ創薬研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究企画部
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 マーケティング部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究開発管理グループ
フナコシ株式会社
株式会社ボナック
三菱化学株式会社 経営戦略部門 RD 戦略室
ヤマサ醤油株式会社 R & D 管理室
ライフテクノロジーズジャパン株式会社
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
ワケンビーテック株式会社 学術部

(28 社、50 音順)

■第 37 回（2014 年）日本分子生物学会年会 公式サイト

URL: <http://www.aeplan.co.jp/mbsj2014/>

■日本分子生物学会 Facebook 公式アカウント

URL: <http://www.facebook.com/mbsj1978/>

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp

第37回 日本分子生物学会年会

The 37th Annual Meeting of the Molecular Biology Society of Japan



会 期 **2014年11月25日(火) ～ 27日(木)**

年会長 **小安 重夫** (理化学研究所統合生命医科学研究センター)

会 場 **パシフィコ横浜**

演題投稿受付期間 **2014年7月1日(火) － 7月31日(木)**

事前参加登録期間 **2014年7月1日(火) － 9月30日(火)**

連 絡 先 第37回日本分子生物学会年会事務局 (株式会社エー・イー企画 内)
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 岩波書店一ツ橋別館4F
Tel: 03-3230-2744 Fax: 03-3230-2479 E-mail: mbsj2014@aeplan.co.jp

大会HP **<http://www.aeplan.co.jp/mbsj2014>**



The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年 3 回刊行)

第 108 号 (2014年6月)

発 行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——大隅 典子